

授業改善・学力向上

児童生徒の学力向上を目指した授業改善の在り方 — 校内研究と関連付けた「授業力向上支援シート」の作成を通して —

平成24年度 授業改善・学力向上研究グループ

専門研究員	名取市立ゆりが丘小学校	三品 秀樹
	石巻市立蛇田中学校	木村 徹之
	登米市立東郷小学校	千葉 高
指導主事	教職研修班	山内 尚
	企画研究班	萱場 恒行
	教職研修班	市岡 良庸
	企画研究班	太田 克佳

概要

児童生徒に「確かな学力」を身に付けさせるためには、授業を改善することが求められている。

本研究は、個々の教員が抱える授業力¹の課題に注目し、自分の課題を解決するために「学んだことの活用と振り返り」を繰り返す取組を、校内研究²と関連付けて進められるよう「授業力向上支援シート」を作成することで、校内研究の場を活用して授業力の向上を図り、授業の改善につなげる取組を追究したものである。

1 主題設定の理由

学校教育における日本の児童生徒の実態について、TIMSS³2007及びPISA⁴2009等の国際的な学力調査の分析結果は、読解力や知識・技能を幅広く活用する力、学ぶ意欲等に課題があるとしている。そうした中、完全実施された小・中学校の学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度、学習意欲の「確かな学力」を育成することを求めている。また、平成24年8月中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、これからの教員に求められる資質能力として「実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探求心をもち、学び続ける存在であることが不可欠である（『学び続ける教員像』の確立）」と述べている。

宮城県教育研修センターでは、平成15年度に校内研修の充実を目的として、児童生徒の学力に関する実態、及び校内研修の実情や課題を探り、教員の学習指導における実践的指導力を高めるための「校内研修ガイドブック」の作成を通して、児童生徒の学力向上を目指す校内研修の在り方を提言した。また平成19年度には、研究授業を日常化・活性化させ児童生徒の学力向上を目指すことを目的として、教員間で授業を参観し合い、協働して振り返り、成果と課題を共有する校内研修体制を整える必要性を指摘し、日常の授業実践を基盤とした「授業研修システム」を構築してその活用方法を提言した。一方、平成20年3月「宮城県教員研修マスタープラン」では、「学校教育の充実を図る上で、教員の資質向上は最も重要な課題である」と述べている。また、求められる資質能力として「学校の教育力を構成する実践力」「実践力の基盤となる意欲・人間性等」を挙げ、「自ら学び続け、教員として成長

1 授業力とは、平成20年3月に宮城県教育委員会から出された「宮城県教員研修マスタープラン～学び続ける教員のために～」の中で教員に求められる資質能力の1つとして述べられた授業力に基づき設定したものであり、具体的には、教科の専門知識に加えそれを的確に活用し考えたり教授に活かしたりできる等の専門性を伴う力のこと（3. 2. 1参照）

2 校内研究とは、校内研修の中でも年間を通して計画的・継続的に自校の教育課題の解決や教員の資質能力の向上を目指して行われる研究のこと

3 TIMSS (Trends in International Mathematics and Science Study) とは、国際教育到達度評価学会 (IEA) が実施する国際共同研究調査の1つである「国際数学・理科教育動向調査」のこと

4 PISA (Programme for International Student Assessment) とは、経済協力開発機構 (OECD) による国際的な生徒の学習到達度調査のこと

し続けようとする意欲と能力（自己研さん力）」を根幹として位置付けている。平成24年3月「宮城県学力向上推進プログラム（改訂版）」では、「教員が、『授業のプロ』として指導力を高めていくためには、教科内容に関する専門知識の理解を前提としつつ、最も効果的な授業を行うための教授法の専門性を不断に高め、授業の改善を目指すこと」を求めている。さらに、「教員による日々の研さんと資質の向上が必要であり、校内研修をより充実させるための支援を展開していくことが重要である」とも述べている。

児童生徒の学力向上を目指すために、個々の教員の資質能力の向上が必要である。そのために校内の研修において、個々の教員が自ら学び続けることができるような支援を展開することが重要である。

そこで、県内の各学校の現状を把握するため平成24年度小・中学校新任研究主任研修会及び小・中学校新任教務主任研修会において、「校内研究に関する質問紙調査」を実施した（小学校100校、中学校64校が回答）。

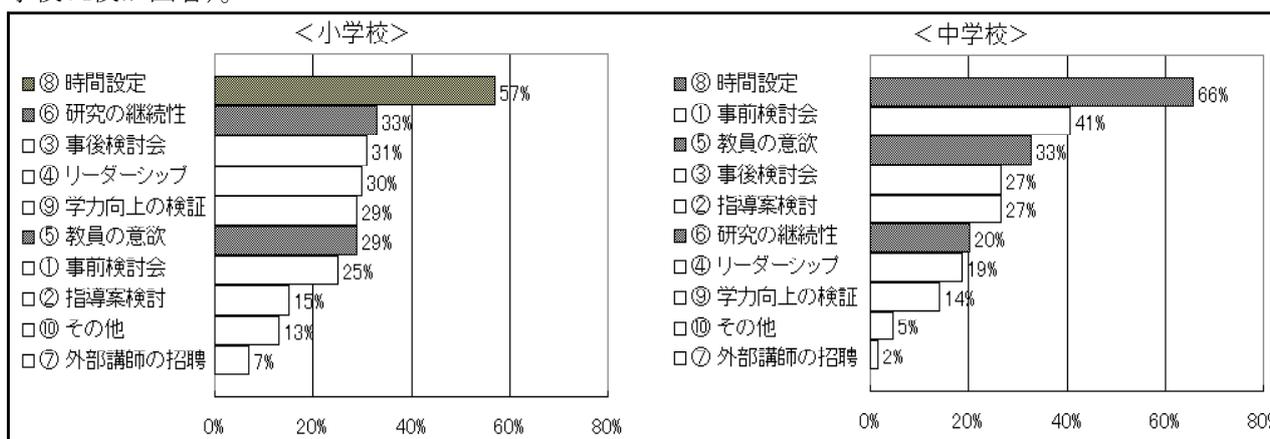


図1 校内研究を進める上で課題となっていること（複数選択可）

質問紙調査の「校内研究を進める上で課題となっていることは何ですか」との項目に対して、多くの学校が「研究のための時間設定が難しい」と回答した（図1）。また、事前検討会や事後検討会、指導案検討を課題として挙げた学校の多くは、その理由として「時間の確保が難しいから」と回答した。校内研究を進める上で、話し合いの時間を確保したり、全員が集まる場を設定したりすることが難しい現状がうかがえる。また、個々の教員の研究に対する意欲面や研究の継続性を課題として挙げた学校もあり、「研究に対する温度差がある」「研究に対して進んで取り組もうとする教員とそうでない教員との二極化が見られる」「研究授業から日々の実践への継続性が難しい」「研究授業が終わるとそれきりになりやすい」等の自由記述が見られた。これは、校内研究に取り組むことで自分の資質能力の向上につなげようという意識が教員によって差があることが明らかである。その原因として、校内研究に取り組む際に明確な自己目標をもてずいたり、校内研究で取り組むことと自分が取り組みたいことの間になずれがあったりするのではないかと推察した。そこで、その課題を解決して校内研究に取り組むことで、教員の意欲の向上につながったり、研究授業後に取組が継続したりするのではないかと考えた。そのためにも、校内研究の中に「意欲向上のための工夫」や「継続していくための工夫」を取り入れていく必要がある。また、時間設定が難しいからこそ限られた時間や場を有効に活用し、校内研究を進めなければならない。

以上のことから、学校として児童生徒の学力向上を目指した教育を展開していくためには、個々の教員が学ぶ意識を高くもち継続的に授業力向上を図りながら、授業改善を進めていくことが重要である。そこで、個々の教員の授業力向上を図るために、自分が抱える授業力の課題を明らかにして、解決のための手だてと校内研究の視点（仮説）とを関連付けて自己目標を設定し、その授業力向上の取組を「授業力向上支援シート」で支援できれば、個々の教員の意欲の向上と取組の継続を図りながら進めることができるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 研究目標

個々の教員が抱える授業力の課題を明らかにし、その課題を解決するための取組を校内研究に関連付けて進めるために「授業力向上支援シート」を作成し、児童生徒の学力向上を目指した授業改善の在り方を追究する。

3 主題及び副題について

3. 1 主題「児童生徒の学力向上を目指した授業改善の在り方」について

学校教育法第30条第2項には、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」と学力の重要な要素が示されている。このことから、本研究では学力を、

- ① 基礎的・基本的な知識・技能
- ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③ 主体的に学習に取り組む態度、学習意欲

の3つの要素を合わせた総合的なものとする。

質問紙調査の結果が示す通り、個々の教員の校内研究への取組は、意欲面や継続性及び成果の波及等において個人差が生じやすい。そこで、個々の教員が高めたい授業力を、校内研究の場を活用して向上させることができれば、学び合いや認め合い、成果の共有といった協働のよさによって、個人差に関わる課題が解決されることが期待できる。また、個々の教員が意欲的に校内研究に取り組むことで、そこで得られる成果の質が高まると考えた。

そこで本研究では、個々の教員が抱える授業力の課題を明らかにし、解決のための手だてを校内研究の視点（仮説）と関連付けて実践し、「学んだこと⁵の活用と振り返り⁶」を繰り返しながら授業力向上を図る。その取組を通して、児童生徒の学力向上を目指した授業改善の在り方を追究したい。

3. 2 副題「校内研究と関連付けた『授業力向上支援シート』の作成を通して」について

3. 2. 1 「授業力向上支援シート」について

(1) 授業力について

本研究では「宮城県教員研修マスタープラン」を基に、教員の授業力を児童生徒理解力、教材解釈力、授業構成力、授業実践力、授業改善力の5つの力で構成されるものとした。授業改善力を土台として、その上に児童生徒理解力と教材解釈力、授業構成力からなる授業実践力が位置付けられ、授業力を構成すると捉えた（図2）。そのために、授業力を構成する5つの力の中でも特に授業改善力を重視しながら、「学んだことの活用と振り返り」を校内研究と関連付けて繰り返し行い、5つの力で構成される授業力を伸ばしていく。

また、授業力を構成する5つの力と身に付けたい力の内容を次頁表1に示した。



図2 授業力を構成する5つの力

5 「学んだこと」とは、教員が校内研究や授業から得た授業づくりに関する知識や指導技術、考え方の中で、授業で実践し検証することが可能なものこと

6 「活用と振り返り」とは、授業力向上を通して授業の改善を図るために、学んだことを授業で実践し、その結果を検証して次の授業に活かす取組のこと

表1 授業力を構成する5つの力と身に付けたい力の内容

授業力	身に付けたい力の内容
児童生徒理解力	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒一人一人の学習意欲や学習内容の定着状況、学級における人間関係等の状況を把握する力 児童生徒の発言や行動等を共感的に受け止める力
教材解釈力	<ul style="list-style-type: none"> 授業に用いる教材や資料の分析を的確に行い、ねらいに合った教材や資料を選択・開発したり活用したりする力
授業構成力	<ul style="list-style-type: none"> 指導計画を立案する際に単元や各時間のねらいを明確にし、その達成のためにふさわしい教材解釈やそれに基づく展開や学習形態の工夫を行う力 適切な評価内容及び実施計画を設定する力
授業実践力	<ul style="list-style-type: none"> 授業展開に関わる様々な力 <ul style="list-style-type: none"> 板書を構造化したり、発問、指示を適切に行ったりする力 児童生徒の学習状況に応じて、臨機応変に対応できる力 学習習慣、学習態度を育成する力 学習環境を整備する力 互いに高め合う学習集団づくりを行える力 評価計画に基づいて、評価を行う力
授業改善力	<ul style="list-style-type: none"> 自分の現状を知り、自己課題の解決を目指して授業を実践し続ける力 成果や課題に対する改善策等を授業に取り入れて実践する力 教員同士で学び合うことができる力 授業で活用できるように学んだことを記録・蓄積する力 評価や児童生徒の反応等から授業を振り返る力

(2) 「授業力向上支援シート」について

個々の教員が授業力向上の取組の中で「学んだことの活用と振り返り」を繰り返すのは、学んだことを授業力として身に付け、授業改善を進めるためである。その際、「意欲向上のための工夫」や「継続していくための工夫」が必要である。そこで、具体的な3つの支援の場面を以下のように設定した。

- ① 年度始に授業力の現状を知り、改善のための目標や見通しをもつ場面の設定
- ② 授業力向上のための学びを得て学んだことの活用と振り返りをする場面の設定
 - ・授業力向上のために学びを得る
 - ・授業力向上のために授業での実践を振り返り、目標を見直す
 - ・授業力向上のために学んだことを活用する
 - ・授業力向上のために学んだことを共有し、蓄積する
- ③ 年度末に授業力の向上を確認する場面の設定

また、3つの支援の場面において、個々の教員が自己目標に迫ることができるようにするとともに、各取組を一連のものとして継続できるように「授業力向上支援シート」を作成した(表2)。

表2 「授業力向上支援シート」と具体的な支援の場面の関連一覧表

番号	シートの名称	支援の場面	番号	シートの名称	支援の場面
1	授業力セルフチェックシート	①, ③	6	見合いシート	②
2	目標設定シート	①	7	振り返りシート	②
3	目標実現シート	①, ②	8	成果一覧シート	②, ③
4	学びシート	②, ③	9	まとめシート	③
5	指導案シート	②	10	結果シート	③

3. 2. 2 校内研究との関連付けについて

個々の教員が「授業力向上支援シート」を活用して、授業力向上の取組を進める。その際、個々の教員が無理なく取組を進められるように、実施時期を含む具体的な支援の場面と校内研究の主な取組を関連付けた。

(1) 年度始に授業力の現状を知り、改善のための目標や見通しをもつ場面

この場面は、校内研究の年度始の取組と関連付ける。ねらいは、以下の4つである。

- ・全教員が授業力向上の取組の必要性や進め方の共通理解を図り、協働の基盤づくりをすること
- ・個々の教員が自分の授業力の現状を知ること
- ・個々の教員が授業力の課題を把握し、課題を解決する手だてと校内研究の視点（仮説）を関連付け、校内研究の場を活用して授業力向上の取組を進められるようにすること
- ・個々の教員が授業力向上の自己目標を設定するとともに自己目標に迫るためのスモールステップを設定すること

これらのねらいを達成するための取組は、「ガイダンス」及び、授業力セルフチェックシート、目標設定シート、目標実現シートの活用である。これらの取組の実施は、校内研究における年度始の研究全体会で行う。ただし、時間設定が難しい場合は学年・教科等⁷の会や研修日に分けて行うことも考えられる。

(2) 授業力向上のための学びを得て学んだことの活用と振り返りをする場面

この場面は、4つの内容で構成され、校内研究の年度始と年度末を除いた取組に関連付ける。ねらいは、以下の5つである。

- ・個々の教員が自己目標に迫るために、必要な学びを校内研究の取組から得ること
- ・個々の教員が自己目標に迫るために、自分の取組を振り返り、スモールステップの設定や手だてを見直すこと
- ・個々の教員が自己目標に迫るために、学んだことを活用した授業を行い、それを教員同士で見合うこと
- ・個々の教員の取組の成果を共有して、学びを得られるようにすること
- ・個々の教員が年間を通して学んだことを記録・蓄積し、必要なものを選択していつでも活用できるようにすること

これらのねらいを達成するための取組は、「授業の見合い」及び、指導案シート、振り返りシート、見合いシート、学びシート、成果一覧シート、目標実現シートの活用であり、校内研究における各取組と次のように関連付ける。「授業の見合い」では、見合いシートを活用し、研究授業後の事後検討会で明らかになった成果や課題の改善策を日常の授業に活かす。指導案シートは研究授業と、振り返りシート、目標実現シートは事後検討会と関連付ける。さらに、学びシート、成果一覧シートは、校内研究の事前検討会から事後検討会後の日常の授業までの幅広い取組と関連付ける。

ただし、事後検討会での活用を想定した振り返りシート、目標実現シートについては、時間設定が難しい場合、学年・教科等の会や研修日に行うことが考えられる。この場面は、「自己目標に応じて学んだことを授業で活用し振り返ること」を校内研究と関連付けて繰り返すことで、授業力として身に付ける大切な場面である。

(3) 年度末に授業力の向上を確認する場面

この場面は、校内研究の年度末の取組と関連付ける。ねらいは、以下の2つである。

- ・個々の教員が年間の取組を振り返り自分の授業力の変容を知ること、向上を実感したり次年度の授業力向上の取組に対する意欲の向上・維持を図ったりすること
- ・自己目標の達成状況に応じた改善の方向性を検討し、次年度の目標設定の際に役立てられるようにすること

これらのねらいを達成するための「授業力向上支援シート」は、授業力セルフチェックシート（年度末）とまとめシート（結果シート）の他、学んだことが記録されている学びシート、成果一覧シートである。これらのシートの実施は、校内研究における各取組と次のように関連付ける。授業力セルフチェックシート（年度末）とまとめシートは、研究のまとめを行う時期に、学年・教科等の会や研修日に行うことを想定した。進め方によっては、年度末の研究全体会と関連付けて実施する

7 学年・教科等とは、学年、教科、学年部、教科部のこと

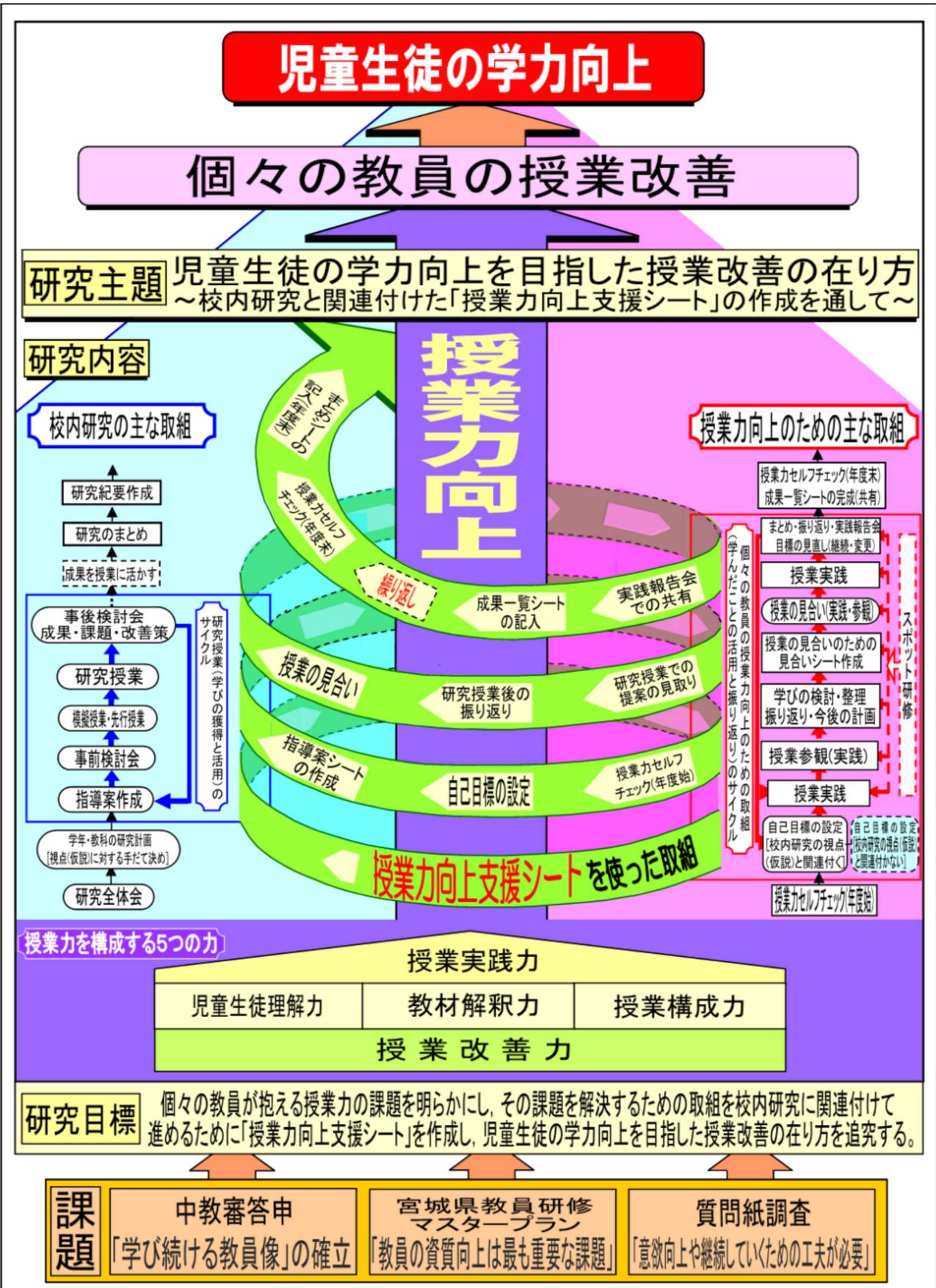
ことも考えられる。

表3は、授業力向上の取組と校内研究との関連を、支援の場面と使用する「授業力向上支援シート」を示して表したものである。

表3 授業力向上のための取組と校内研究の関連

支援の場面	校内研究の 主な取組	授業力向上のための主な取組	使用する「授業力 向上支援シート」
① 年度始 授業力の現状を知り、改善のために目標や見通しをもつ場面	<ul style="list-style-type: none"> ・研究全体会 ・学年・教科等の研究計画作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・ガイダンス ・授業力向上支援シートを使うための初期設定 ・授業力のセルフチェック ・自己目標の設定 ・自己目標の絞り込み、達成へ向けたスモールステップの設定 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業力セルフチェックシート ・目標設定シート ・目標実現シート
② 年度中 授業力向上のための学びを得て学んだことの活用と振り返りをする場面	<ul style="list-style-type: none"> ・指導案作成 ・事前検討会 ・模擬授業 ・先行授業 ・研究授業 ・事後検討会 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導案シートの作成 ・参観観点の検討 ・授業参観、授業実践 ・成果・課題・改善策の検討 ・振り返り・見通し・計画 ・授業の見合い ・実践報告会 ・学んだことの記録・蓄積 ・目標、手だて、ステップの再検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導案シート ・振り返りシート ・見合いシート ・学びシート ・成果一覧シート ・目標実現シート
③ 年度末 授業力向上を確認する場面	<ul style="list-style-type: none"> ・研究のまとめ ・研究紀要作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・成果一覧シートの完成 ・授業力のセルフチェック ・まとめシートによる振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・成果一覧シート ・授業力セルフチェックシート ・まとめシート ・結果シート

4 研究構想図



5 研究の方法及び内容

5. 1 文献研究

- ・先行研究（事例）や文献等から、これまでの授業研究の課題やこれからの授業研究の進め方を探る。

5. 2 教員の意識調査

5. 2. 1 調査のねらい

- ・各校における研究授業の取組の現状を把握し、その進め方を考察する際の資料とする。
- ・個々の教員の授業力向上を支援する際の資料とする。

5. 2. 2 調査の対象

- ・小学校100校、中学校64校の教員（平成24年度小・中学校新任研究主任研修会、小・中学校新任教務主任研修会参加者）

5. 2. 3 調査期日

- ・平成24年5月28日（小・中学校新任研究主任研修会参加者）
- ・平成24年6月7日（小・中学校新任教務主任研修会参加者）

5. 2. 4 調査の方法及び内容

- ・校内研究に関わる取組についての質問紙調査
- ・質問紙調査用紙

5. 2. 5 調査結果

- ・調査集計結果分析（補助資料1）

5. 3 「授業力向上支援シート」を使った取組について

「授業力向上支援シート」において意欲向上のための工夫と継続のための工夫を表4にまとめた。これらのシートを実践することで、個々の教員の授業力向上の取組を進めることができるようにする。

表4 「授業力向上支援シート」の目的とその工夫

番号	シートの名称 (使用場面)	シートの目的	意欲向上のための工夫 〈意〉 継続していくための工夫 〈継〉
1	授業力セルフ チェックシート (年度始の研究 全体会)	・学力向上を目指した授業づくりに必要となる留意事項を18のチェック項目にまとめ個々の教員が自己診断で授業力の現状を把握する。	〈意〉 ・授業力を構成する5つの力ごとに診断項目を設け、チャートやグラフで結果を表して、自分の授業力の現状を見取りやすくする。 〈継〉 ・診断項目や評価の観点は、各校の研究主題や実情に合わせて更新する等、自校化を図る。
2	目標設定シート (年度始の研究 全体会)	・セルフチェックの結果を示し、自校の校内研究の研究主題や研究の視点(仮説)と照らし合わせながら、個々の教員が高めたい授業力の診断項目を選択する。 ・高めたい授業力を向上させる手だてと校内研究の視点(仮説)とを関連付けることで、授業力向上の取組を校内研究に沿って進める。	〈意〉 ・高めたい授業力を向上させる手だてと校内研究の視点(仮説)とを関連付ける。 ・高めたい授業力を「校内研究」「個人」のどちらで行うか選択する。 〈継〉 ・「向上のための具体的手だて」の欄は、年度途中で内容を更新しながら、手だてを具体化する。

児童生徒の学力向上を目指した授業改善の在り方

3	目標実現シート (研究全体会后)	<ul style="list-style-type: none"> 個々の教員が高めたいと考えた授業力の診断項目からさらに取組の優先順を設定して絞込みを行い、具体的な目標設定を行う。 	<p>〈意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 取り組む項目は、はじめは1つでもよい。無理なく進めることで目標の実現につなげる。 <p>〈継〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己目標設定から目標達成までのスモールステップを用いた流れをロードマップのように表し、振り返りや取組に応じた見直しができるようにする。
4	学びシート (事前検討会から研究授業後の日常の授業実践まで)	<ul style="list-style-type: none"> 授業力向上のための取組から気付きや学んだことを、個人で蓄積する。 	<p>〈意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 学びを書き足していく書式とし、量的に取組に対する充実感を感じさせる。 <p>〈継〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業参観のみならず、普段の教育活動を通して学び得たことを、このシートに書き留め、学びの蓄積を図る。
5	指導案シート (研究授業)	<ul style="list-style-type: none"> 研究の視点や仮説とその手だて及び留意点に加え、授業者の提案として自己目標達成へ向けた手だてを学習過程に位置付けて、自分の授業力向上へ結び付ける。 参観観点を設定し、参観しての気付きや学んだこと等を書き込み、後に整理して授業力向上に役立てる。 	<p>〈意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分が高めたい授業力についての学びが得られるように、授業者は「私の提案」を、参観者は「参観の観点」を書く欄を設定する。 <p>〈継〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 参観者が記入後にファイルして蓄積し、振り返りやすくする。 使いやすさを考慮したり、記述する量を調節したりする。
6	見合いシート (研究授業後の授業の見合いの設定期間中)	<ul style="list-style-type: none"> 授業者の提案に対して、参観者が自分の学びや授業者のよさ等を記述欄に書き込み、参観者の学びを授業者に還元する。 	<p>〈意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 学年・教科等の授業の話合いで活用したり、全教員で見合ったりすることで個々の教員が成果の共有を図り、新たな学びを得るようにする。 研究授業や授業の見合い後にコピーして授業者に渡すことで、記述欄に書かれた参観者の気付きや学び等が、授業者に還元されて新たな学びを得るようにする。 <p>〈継〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 参観者が記入後にファイルして蓄積し、振り返りやすくする。
7	振り返りシート (事後検討会)	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業から学んだ成果・改善策等を、個々の教員が自分の授業で実践できるように一般化⁸し実践へ向けた具体的見通しを立てる。 	<p>〈意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 個々に記入する時間をとり、その後、グループで話し合うことで、共有を図る。 <p>〈継〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究授業での学びや成果を共有し、学校全体で実践したい場合に活用する。

8 一般化とは、本研究では授業を参観して学んだことや気付き等を、「段階」「学習の場面と手だて」「手だての内容」「指導上の留意点」の4点で再構成してまとめ、様々な教科や単元または題材で活用できるようにすること

8	<p>成果一覧シート (事前検討会から研究授業後の日常の授業実践まで)</p>	<p>・取組の成果を「段階」「学習の場面と手だて」「手だての内容」「指導上の留意点」の4つの項目でまとめ、各自が学んだことを一般化する。</p>	<p>〈意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学年・教科等の授業を話題とした話合いで活用したり、全教員で見合ったりすることで個々の教員が成果の共有を図り、新たな学びを得るようにする。 ・研究授業や授業の見合い後にコピーして授業者に渡すことで、記述欄に書かれた参観者の気付きや学び等が、授業者に還元されて新たな学びを得るようにする。 ・記述内容の個人差に配慮し、話合いや回覧の機会を設定することで、記述内容の充実を図る。 <p>〈継〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一度書いたら終わりではなく、常に内容を更新していく。
9	<p>まとめシート (年度末の研究全体会)</p>	<p>・個々の教員が授業力向上に取り組んだ1年間の成果等を振り返り、次年度への継続を促す。</p>	<p>〈意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2枚目以降は、取り組んだ項目数に応じて活用する。 <p>〈継〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・改善の方向性の欄を設定し、自己目標に対する振り返りを基に次年度の取組の方向性を明確にしたり次年度の目標設定に役立つようにしたりする。
10	<p>結果シート (必要に応じて使用)</p>	<p>・2度の授業力セルフチェックの結果のみを表示する。</p>	<p>〈意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年度の途中に授業力の向上の経過を確認したい場合に活用する。 <p>〈継〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業力セルフチェックのみ導入したい場合に使用する。

5. 3. 1 年度始に授業力の現状を知り、改善のために目標や見通しをもつ場面を設定すること

(1) ガイダンス (校内研究との関連：年度始の研究全体会)

研究主任は、授業力向上の取組を校内研究と関連付けて進める前に、取組の概要と進め方を個々の教員に周知し、共通理解を図る必要がある。「ガイダンス」は、そのための大切な研修である。「ガイダンス」では、個々の教員が校内研究を通して授業力向上を図っていくことを確認するとともに、自校の校内研究の方向性や内容について、再度、共通理解を図るようにする。

「ガイダンス」を実施するに当たって、研究主任は会場の設定と説明に必要な補助資料を準備する。その際に行うことは、次の3つである。

- ① プレゼンテーションを行う環境を整えること
- ② 個々の教員がパソコンを使用できること
- ③ 情報交換のためにいくつかのグループに分かれて話し合えるようにすること

また、説明のための「ガイダンス用プレゼンテーション資料」(次頁図3)である「ガイダンス1」「ガイダンス2」の内容をあらかじめ把握しておくことが大切である。

ガイダンスは、はじめに研究主任が校内研究と関連付けた授業力向上の取組の目的と概要及び進め方を「ガイダンス用プレゼンテーション資料」を使って説明し、次に個々の教員がパソコンで授

業力セルフチェックシート（表計算ソフトを使用）を開き、必要事項を入力していくという流れで進める。最後に、学年・教科等の組織でグループに分かれ、各自のセルフチェックの結果や自己目標の設定等について情報交換を行う。その際、自分が取り組みたいことと校内研究の視点が結び付かない場合も考えられるので、視点と関連付かないかグループで検討したり、研究主任が話し合いに参加し、方向付けを行ったりすることが大切になる。さらに、研究の視点について学年・教科等の取組（手だて等）が決定していない場合は、この場を利用し、グループのメンバーの自己目標や高めたい授業力の診断項目等を加味した形で設定することも考えられる。

表示画面

授業力の向上をめざして！

- 1 はじめに
- 2 授業力とは？
- 3 授業力を向上させる！
- 4 終わりに

1 はじめに

T IMSS、P ISA 国際的な学力調査

課題

- ・読解力
- ・知識、技能を幅広く活用する力
- ・学ぶ意欲等

小・中学校学習指導要領

育成

- ・基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ・思考力・判断力・表現力等
- ・主体的に学習に取り組む態度、学習意欲等

↓

「確かな学力」の育成

読み原稿

1 はじめに

○これから、「授業力向上を目指して！」のスライドを使って、「授業力」について説明します。

2 はじめに

○T IMSSやP ISAといった国際的な学力調査の結果を目にしたことがあると思います。その結果分析では、読解力や知識・技能を幅広く活用する力、学ぶ意欲等に課題があると指摘しています。

○また、小・中学校の学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度、学習意欲の「確かな学力」を育成することを求めています。

○こうしたことから、学校や個々の教員は、確かな学力を育成することが求められています。

図3 ガイダンス用プレゼンテーション資料（一部抜粋）

(2) セルフチェック（校内研究との関連：年度始の研究全体会）

個々の教員は、授業力セルフチェックシート（図4）を用いて、授業力のセルフチェックを行う。

授業力セルフチェックシート				実施年度	平成 24 年度
職名	教諭	氏名	青葉 太郎	評価は10段階で行います。(半角数字で入力) ※評価の基準を参考してください。	
番号	分類	診断項目	評価		主な評価の観点
			1回目	2回目	
1	児童生徒理解力	児童生徒の学習意欲をいろいろな見方で把握しようとする。	5		・挙手やしぐさ、活動の様子等から、意欲を把握しようとしているか。 ・学習意欲を促進したり阻害したりする外的な要因を分析しているか。
2		児童生徒の学習内容の定着状況を把握しようとする。	3		・学習の様子、記述内容や提出物等から学習の定着状況を把握しているか。 ・評価を累積し、学習の定着状況を把握しているか。
3	教材解釈力	児童生徒の発言や行動等を共感的に受け止めている。	3		・発達段階、友達関係、家庭状況等を把握しているか。 ・一人一人の発言を大切に考え、傾聴の意識をもっているか。 ・一人一人に気を配り、言葉かけを工夫しているか。
4		授業に用いる教材や資料の分析を行っている。	3		・教科等の専門知識を深めるため、書籍や研修等で研さんを積んでいるか。 ・日頃から教材に関連する幅広い情報の収集に努めているか。
5	授業構成力	児童生徒の実態を考慮して教材解釈をしている。	6		・興味・関心をもたせ、学習意欲を高めるようにしている。 ・普段の生活の様子等を考慮するようにしている。
6		ねらいや実態に合う教具や資料を選択したり、開発したりしている。			・児童生徒の実態や学習のねらいを明確にした上で教材解釈をするようにしている。 ・学年や教科、校種間の系統性を意識するようにしている。
7	授業構成力	単元や各時間のねらいを明確にして指導計画を立案している。			・児童生徒の実態等を考慮して、時数、活動内容、学習形態等の指導計画を立てているか。 ・児童生徒の実態等を考慮して、適切な時間配分を行うようにしているか。
8		ねらいに迫るために学習過程を工夫している。			・学習内容に応じて進め方や形態を工夫しているか。 ・適切な教材、教具、資料を用いようとしているか。 ・教えるべきことと考えさせることが明確になるようにしているか。
9	授業構成力	適切な評価計画を立て、評価の場面を設定している。			・ねらいに応じて評価規準を設定しているか。 ・ノート、発言、机間指導など、評価場面を具体的に設定しているか。
10		板書を構造化し、効果的な板書計画を立てている。			・授業の展開が見えるように、分かりやすく板書しているか。 ・チョークの色やライン、囲み等を工夫して、大事なところを示しているか。
11	授業構成力	発問、指示を適切に行っている。			・ねらいに迫る発問を行っているか。 ・思考を広げたり深めたりする発問を行っているか。 ・簡潔ですべきことが分かりやすい指示を出すように心掛けているか。 ・発言や反応、つぶやきを受けて柔軟な対応をすることができるか。

目次

印刷

入力クリア

評価の基準		
評定尺度	量の達成度	評価値
非常に当てはまる		10
		9
かなり当てはまる		8
		7
わりに当てはまる		6
		5
少し当てはまる		4
		3
わずかに当てはまる		2
		1

図4 授業力セルフチェックシート（記入例 一部抜粋）

授業力セルフチェックシートは、授業力を構成する5つの力ごとに複数の診断項目を設けている。項目ごとに評価の観点があり、個々の教員は評価の観点を参考に研究教科における具体的な指導場面を振り返りながら、5段階の評定尺度と10段階の量的達成度から当てはまると思う段階を選択して数値を入力する（授業力セルフチェックシートは、パソコンでの入力と結果の自動作成を前提として作成している）。評価を10段階に設定することで、自己目標の達成に至らない場合でも取組に応じた努力を評価に反映できるように配慮した。各診断項目の評価の観点は主なものであり、研究主任は、必要に応じて加除修正を加え、自校化を図ることが望ましい。

また、個々の教員が年度途中で2回目の授業力セルフチェックを行い、授業の変容（向上）の様子を数値で確認したい場合には、結果シートを活用する（図5）。

結果シート

職名	教諭	氏名	青葉 太郎	実施年度	平成 24 年度
----	----	----	-------	------	----------

	1回目	2回目
児童生徒理解力	3.7	5.0
教材解釈力	5.0	5.7
授業構成力	3.7	3.7
授業実践力	4.3	5.2
授業改善力	3.0	4.3

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
児童生徒理解力			2		1					
教材解釈力			1			2				
授業構成力		2		1						
授業実践力		2	2	1		1				
授業改善力	1	1	1							

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
児童生徒理解力					3					
教材解釈力				1	2					
授業構成力		2		1						
授業実践力		2	2	1	1					
授業改善力		2	1							

目次

印刷

番号	分類	診断項目	評価	
			1回目	2回目
1	児童生徒理解力	児童生徒の学習意欲をい	5	5
2		児童生徒の学習内容の	3	5
3		児童生徒の発言や行動	3	5
4	教材解釈力	授業に用いる教材や資料	3	5
5		児童生徒の実態を考慮し	6	6
6	授業構成力	ねらいや実態に合う教具	6	6
7		単元や各時間のねらいを	5	5
8	授業実践力	ねらいに迫るために学習	3	3
9		適切な評価計画を立て、	3	3
10	授業改善力	振書を構造化し、効率的	7	7
11		発問、指示を適切に行っ	3	5
12	授業実践力	児童生徒の学習状況に	4	4
13		互いを高め合う学習集団	5	5
14	授業改善力	評価計画に基づいて評価	4	4
15		学習環境を整備してい	3	6
16	授業改善力	授業を反省し、振り返っ	2	4
17		授業について教員間で話	4	4
18	成果や課題及び改善策	3	5	

図5 結果シート（記入例）

(3) 課題把握と目標設定（校内研究との関連：研究全体会）

個々の教員は、授業力セルフチェックシートを用いた結果を目標設定シートで確認し、自分の授業力における課題やよさを把握する（図6）。

目標設定シートは、授業力セルフチェックシートの診断項目による評価結果を自動集計したものであり、授業力を構成する5つの力ごとの平均が数値とレーダーチャートで表示される。また、授業力を構成する5つの力ごとに、1から10の評価値がいくつあったかを見取るための評価値ごとの項目数が表示される。そのため、平均化される以前の状況も見取り比較することが可能となる。このように授業力を構成する5つの力に関する自分の現状を数値とチャート図を通して具体的に確認することができる。

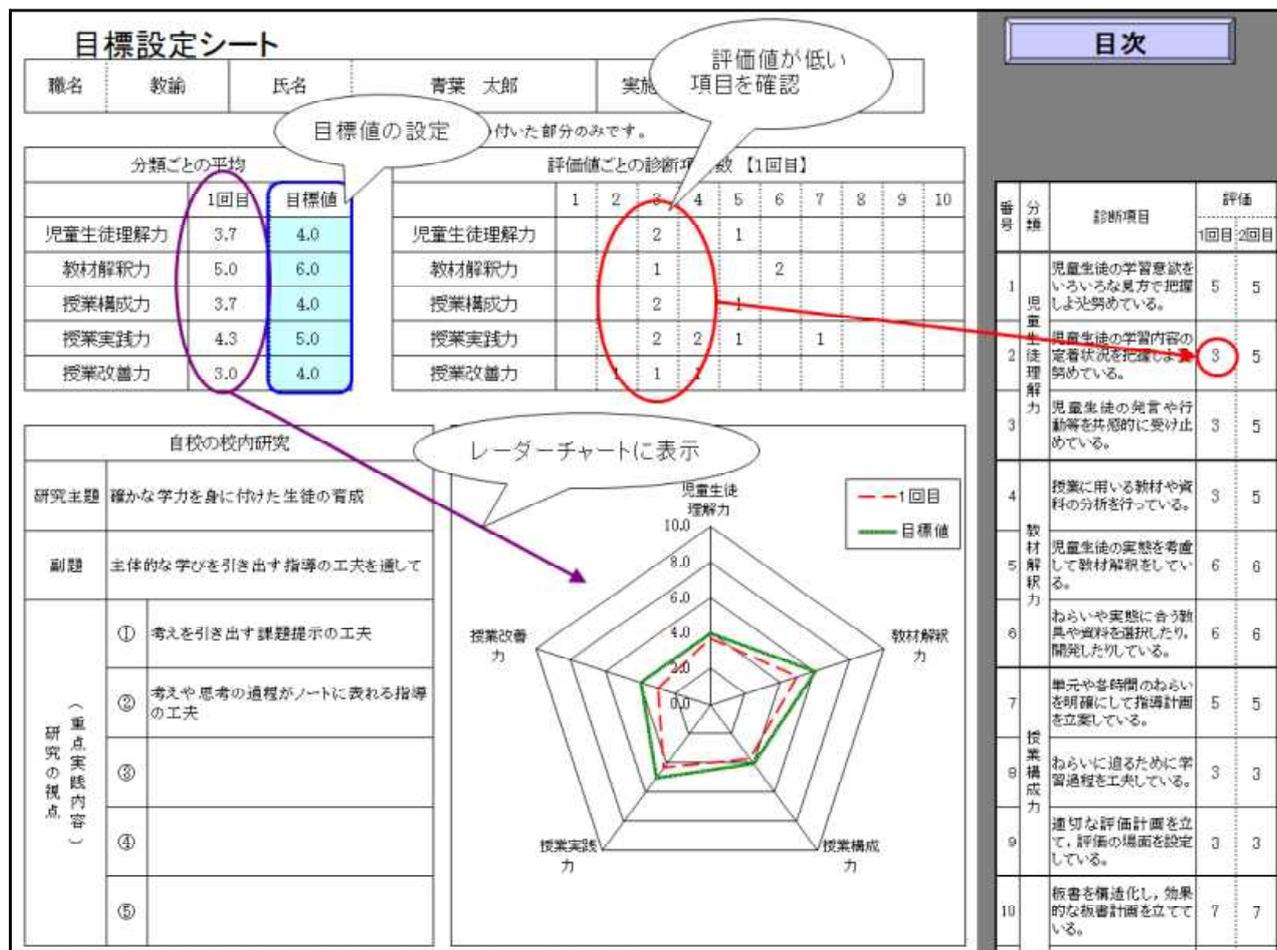


図6 目標設定シートを使った「課題把握」と「目標値の設定」（記入例）

(4) 目標設定（校内研究との関連：研究全体会）

個々の教員は、目標設定シートで把握した自分の授業力の課題を踏まえ、授業力向上のための自己目標を設定する。目標の設定は、目標設定シートと目標実現シートを用いる。

はじめに、目標設定シートの「分類ごとの平均」の目標値の欄に1回目の結果を受けた目標値を設定する（図6）。

次にレーダーチャートや評価値ごとの診断項目数等を参考に、本年度高めたいと考える授業力の診断項目を決定していく。例えば、図6のように、評価値ごとの診断項目数から、評価値の低い項目に着目したとする。その評価値の低かった項目を右側にあるセルフチェック結果と照らし合わせて、実際にどのような授業力の診断項目が低い評価であったのか確認する。この場合、評価値が3以下の項目は9項目あるが、この全てを意識して向上を図ることは、難しいと考える。そこで、本年度に高めたい授業力をさらに絞り込む必要がある。目標設定シートでは、高めたい授業力の診断

項目を7つ以内に絞り込むことを想定して作成している（図7）。

高めたい授業力の診断項目が決定したら、自校の校内研究の取組と照らし合わせて、取組の方向性の欄で「校内研究を通して取り組む」か「個人で取り組む」かを選択する。そして、向上のための具体的手だてを記述する。その際、注意すべき点は、「校内研究を通して取り組む」と選択した項目については、校内研究の視点や学年・教科等で計画した手だてとの関連や整合性を重視して、具体的手だてを設定することである。校内研究の視点（仮説）や手だてに、自分の授業力の課題を解決するための手だてを関連付けることで、校内研究に取り組むことが自分の授業力向上の取組となる。それは、個々の教員の校内研究への主体的な取組を促し、組織としての課題解決をより一層進めることになる。また、計画性のある校内研究の取組に沿って行うことは、協働のよさである学び合いや認め合い等が取組に加わるので、個人で計画・実践・評価を繰り返しながら取り組むよりも、学び続けようという意欲がより一層持続されると考える。

高めたい授業力の向上を考えた際、校内研究と結び付かず取組の方向性として「個人で取り組む」を選ぶ場合がある。その際は、スポット研修⁹を活用したり自主的に学び続けたりする。しかし、継続して取り組むことには困難が予想されるので、高めたい授業力と校内研究の視点（仮説）とが関連付く可能性を学年・教科等の会で話題としたり、研究主任に相談したりして探るようにしたい。個人で自己目標達成までの見通しをもち、取組が継続できるようであれば、適宜、校内研究と関連付けながら進めたい。

ガイダンスの限られた時間内で「向上のための具体的手だて」を具体的に記入することについては、個人差が生じる場合がある。その後の話し合いの場で手だての内容の具体化の悩みについて相談・助言し合うことで、実践へ向けた見通しをもたせたい。しかし、それでも手だての記述に困難を感じている教員に対しては、実践を積み重ねることで記述内容を徐々に具体化させていけばよいことを研究主任が伝え、設定時間内で会を終了する。

研究の視点 (重点実践内容)	①	考えを引き出す課題提示の工夫	授業改善力		教材解釈力	6	ねらいや実態に合う教具や資料を選択したり、開発したりしている。	6	6
	②	考えや思考の過程がノートに表れる指導の工夫				7	単元や各時間のねらいを明確にして指導計画を立案している。	5	5
	③					8	ねらいにせまるために学習過程を工夫している。	3	3
	④						適切な評価計画を立評価の場を設定	3	3
	⑤							7	7
	⑥							3	5
※本年度、高めたいと考えている授業力の診断項目番号を選択して入力してください。									
番号	高めたい授業力の診断項目	取組の方向性	向上のための具体的手だて	授業準備力	授業実践力	授業改善力	授業評価力	授業準備力	授業実践力
2	児童生徒の学習内容の定着状況を把握しようと努めている。	校内研究で取り組む	適用問題に取り組む場面で、ねらいに関わる学習内容の定着状況を把握するための問題を設定し、ノートでチェックする。	12	12	児童生徒の学習状況に応じて、臨機応変に対応している。	4	4	
3	児童生徒の発言や行動等を共感的に受け止めている。	個人で取り組む	共感的な受け止めのスキルを高めるため、書籍や研修会に参加すると共に、普段の授業で心掛けていく。	13	13	互いを高め合う学習集団づくりを行っている。	5	5	
4	授業に用いる教材や資料の分析を行っている。	校内研究で取り組む	考えを引き出す課題が提示できるように、教材や資料の分析を行う。	14	14	評価計画に基づいて評価している。	4	4	
11	発問、指示を適切に行っている。	校内研究で取り組む	課題提示の場面で、生徒の反応に応じて発問や指示の仕方を複数準備し、課題解決のための思考を促すようにする。	15	15	学習環境を整備している。	3	6	
15	学習環境を整備している。	個人で取り組む	教室に学習コーナーを設け、学習係を活用して掲示物を工夫させる。	16	16	授業を反省し、振り返っている。	2	4	
16	授業を反省し、振り返っている。	個人で取り組む	週案を活用し、生徒の反応やねらいの達成状況から授業を反省し、次回の指導に生かすようにする。	17	17	授業について教員間で話し合っている。	4	4	
18	成果や課題及び改善策等を授業に取り入れて実践している。	校内研究で取り組む	授業研究で他の先生方の実践から学んだことを自分の授業に取り入れて実践していく。	18	18	成果や課題及び改善策等を授業に取り入れて実践している。	3	5	

図7 目標設定シート「高めたい授業力の診断項目」（記入例）

9 スポット研修とは、個々の教員が授業力向上に取り組む中で生じた悩みや困難を軽減化したり、校内研究と関連付かない自己目標の達成に迫る支援としたりするために、本研究で提案する取組のこと

次に、個々の教員は、目標設定シートの記入を完了したら、目標実現シートを使用して、具体的な自己目標の設定を行う。目標実現シートでの目標設定の手順は、

- ① 優先順の決定
- ② 自己目標の設定
- ③ 目標に向かう上での課題の認識
- ④ スモールステップの設定
- ⑤ 自己目標を達成した自分の姿の予想

の順で行う。

① 「優先順の決定」について

個々の教員は、自分が高めたい授業力の診断項目について、校内研究で取り組む項目と個人で取り組む項目のそれぞれで取組の優先順を決定する(図8)。校内研究で取り組む項目の中で優先順を1番とした項目が目標実現シートの左側の欄に転記されるので、シートの矢印の流れに沿って自己目標を設定していく。

また、優先順2番以降の項目や個人で取り組む項目については、同時進行で進めていくか、優先順1番の目標が達成された後に進めていくかを、個々の教員が自分の意思で選択する。自己目標を2つ以上設定する場合、目標実現シートの右側の設定欄と2枚目以降の設定欄を使用し、次のA, B, Cから、その取組の方法を選択する。

- A 校内研究で取り組む
- B 個人で取り組む
- C 空欄

Aについては、高めたい授業力の診断項目を向上させる取組が全て校内研究で行える場合や校内研究で行えるものを中心に選択する場合である。

Bについては、高めたい授業力の診断項目を向上させる取組が、校内研究と関連付かない場合である。

Cについては、高めたい授業力の診断項目を向上させる取組を1つに絞って校内研究で行う場合である。

2つ目以降の自己目標設定の場合に、右側の設定欄を上記のA, B, Cから選択できるようにして、個々の教員の考え方に対応した。

図8 目標実現シート(記入例)

② 「自己目標の設定」について

自己目標は、努力すれば達成可能な範囲で設定することが望ましい。自己目標を設定する際は、「いつ」「何を」「どこで」「どうするか」ということが分かるように、自分の行動を具体的に記述することが、授業力向上のための取組を継続的に進めたり、他の教員とよりよく共有を図ったりする際に重要である。しかし、全ての教員が、はじめから具体的な手だてを考えることは難しい。そこで、個々の教員は実践を進めたり、研究主任をはじめとした他の教員との話し合いをしたりする中で、自己目標の見直しと修正を適宜行うようにして授業力向上を図ることができるようにする。

③ 「目標を達成する上での課題の認識」について

自己目標を設定したら、高めたい項目に関する自分の現状を記述することで、自分が抱える課題を認識する。

④ 「スモールステップの設定」について

教員によっては、自己の現状と自己目標の間に大きな壁があったり、その前段階で解決しなければならない課題があったりすることが考えられる。その場合、自己目標の達成に向けた見通しをもつために、スモールステップを用いて自己目標を設定することが重要である。そこで、目標実現シートでは、スモールステップを2段階で達成期日とともに設定し、それぞれ「達成へのSTEP1」「達成へのSTEP2」としている。また、研究授業後の事後検討会や長期休業期間中における研修会等で、個々に振り返りの時間を設けてスモールステップの達成度を確認し、必要に応じて記述内容を見直す。

⑤ 「自己目標を達成した自分の姿の予想」について

自己目標の達成に向け意欲を高めるためには、自己目標を達成した際の自分の成長した姿を具体的に想像することが効果的であると考えられる。目標実現シートでは、自己目標を達成した際、「どんな自分になっているか」を授業や児童生徒との関係等から成長した姿を予想して記述し、自己目標を達成しようという意欲に結び付けていく。

5. 3. 2 授業力向上のための学びを得て学んだことの活用と振り返りをする場面を設定すること

(1) 指導案シートの作成（校内研究との関連：事前検討会前）

研究授業の授業者は、学習指導案（以下、「指導案シート」）を作成する。本研究で使用する指導案シートは、参観者の視点に留意する。参観者が研究の視点に対する手だてや留意点、あるいは授業者の提案（以下、私の提案）を理解しやすくするため、提案部分を詳しく述べるようにする。「私の提案」とは、授業力向上の取組を校内研究と関連付けて進めるための工夫である。自己目標達成のための手だてが、校内研究の視点（仮説）とは関連付くが学年・教科等で計画した手だてとは関連付かない場合、授業者は「私の提案」として指導案シートに記述する（図9）。次頁図10、図11は、指導案シートの作成例である。

校内研究
視点3：自分の考えを深め、高め合う場の工夫 学年・教科等の手だて：学習形態
授業力向上の取組
視点3：自分の考えを深め、高め合う場の工夫 自己目標達成の手だて：キーワードの活用、誤答の活用
私の提案に至った経緯
自己目標を「児童の発表や反応を受けて柔軟に対応し、本時の目標に迫る」としたので、視点3「自分の考えを深め、高め合う場の工夫」と関連付けて進められると考えた。しかし、学年・教科等で計画した手だてが「学習形態」なので、自己目標と結び付けるのは難しい。そこで、自己目標達成の手だてを「キーワードの活用、誤答の活用」と考え、私の提案として指導案シートに記述した。

図9 指導案シートの「私の提案」について

【参観の観点の設定：自己目標に照らし合わせて、どの場面で、何を見取りますか？】
 【どの場面で】 【何を】 ○ねらいや実態に合う教具や資料を選択したり開発したりしているか
 ○「3折り方や学習の進め方を確認する」

算数科学習指導案シート

参観者は、自分が高めた授業力の診断項目に関連付けて、参観の観点を決して授業を参観する

1 単元名 「分けた大きさをあらわそう（分数）」

2 本時の指導

(1) 目標

四半分にした大きさを四分の一といい、 $\frac{1}{4}$ と書くことを理解する。

(2) 本時の提案

【視点1】児童の学習意欲を高めるための導入の工夫

・場面絵と既習事項の活用

【視点2】算数的活動にスムーズに取り組ませるための支援の工夫

・作業の際の留意点一覧表の活用

【視点3】自分の考えを深め、高め合う場の工夫

・学習形態の工夫

(3) 私の提案（関連：研究の視点3 高めたい授業力：授業実践力）

・キーワードを設定し、それを基に教員が発表やつぶやきの中のキーワードを活用したり、誤答を活用したりして、児童が考えを深めたり高めたりする支援とする。

【自己目標】児童の発表や反応を受けて柔軟に対応し、目標に迫ること

(4) 具体的評価規準

	具体的評価項目	十分満足できる(A)	努力を要する児童への具体的支援
数学的な思考	1/4の大きさは、元の大きさによって、いろいろあることに気付いている。	1/4の大きさとその元になる大きさの関係に触れながら、理由を説明することができる。	いろいろな1/4の大きさとその元になる大きさの組合わせを見せながら、基の大きさが変わると1/4の大きさもいろいろになることに気付かせる。
知識・理解	1/4の大きさは、元の大きさによっていろいろあることに気付いている。	1/4の大きさとその元になる大きさの関係に触れながら、理由を説明することができる。	いろいろな1/4の大きさとその元になる大きさの組合わせを見せながら、基の大きさが変わると1/4の大きさもいろいろになることに気付かせる。

(5) 板書計画

長方形を半分の半分において切りましょう。

元の大きさ 長方形 → 4等分 例1

↓

4等分 例2

↓

4等分 例3

・長方形が4つ(直角三角形が4つ)
 ・ぴったりかさなった。
 ・形も大きさも同じ。

同じ大きさに4つに分けた1つ分を、もとの大きさの四分の一という。

$\frac{1}{4}$ …③
 $\frac{1}{4}$ …①
 $\frac{1}{4}$ …② と書く。

□ は □ の $\frac{1}{4}$ です。□ をいくつあつめると □ になりますか。

4つ
 もとの大きさとぴったりかさなるから

もともなる長さ おる回数

1
2
3

$\frac{1}{8}$ …③ 同じ大きさに8つに分けた1つ分をもとの大きさの八分の一

↓

※半分の半分の半分において切る 3回

(6) 学習過程

導入	主な学習の流れ (◇主な発問)	予想される児童の反応	指導上の留意点 (※は支援、◎評価規準と方法)
3分	1 既習内容と4等分することを比べ、学習内容に関心を高める。 ◇ピザをどう分けていますか。 ◇半分にしてまた半分にするとはいくつに分けることですか。 ◇前の時間と違う点は何ですか。	・今日は、ピザだ。 ・こうです。(身振り) ・半分の半分です。 ・4つです。 ・2つじゃなく4つに分けるところ。	【視点1】児童の学習意欲を高めるための導入の工夫 提案 参観者が記述する部分 生活したり半分をした大きさの表し方を推察させたりして、学習内容に関心を高める。
視点1	【提案1について(よさやアドバイス、気付いたこと等、※改善点は質問形式で)】 ○ピザの場面絵を用いたことは、生活場면을想起させ、また既習事項と結び付けて考えやすく関心を高める上で有効だった。 ○児童の反応から、前時の学習内容が定着していることがうかがえた。 ※「1/4」という声がかえってきたので、その意味を発表させてから本当にそうなるのか確かめていくような指導案にはない臨機応変な進め方をしていたらどうでしょうか。		
	2 問題文を読み題意をつかむ。 長方形の紙を半分の半分において切りましょう。 ◇半分にする回数は、前の時間よりも何回多いですか。	・1回です。	・前時の操作活動と比べることで、操作の見通しをもたせる。

図10 「指導案シート」の例① (記入例)

児童生徒の学力向上を目指した授業改善の在り方

<p>展開 32分</p> <p>視 点 2</p>	<p>3 折り方や学習の進め方を確認する。 ◇折り方や切り方、間違っただけについて、説明する。 ◇例2,例3に取り組みましょう。</p> <p>4 各自、長方形の紙を折って切る。 ◇長方形の紙を半分の半分に折って切りましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・表を見たり、前時のことを思い出しながら、説明を聞いている。 ・2つにするんだね。 ・半分の半分に折って紙を切っている。 ・表で確認している。 	<p>【視点2】算数的活動にスムーズに取り組ませるための支援の工夫</p> <p>提案2：操作をスムーズに行わせてねらいに迫るために、折り方や切り方及び間違っただけの留意点を一覧表（うまくいくこつ）にまとめていつでも確認できるようにしたり、一覧表に対応しながら示範したりする。</p> <p>※進まない児童には教師が切った紙を渡す。早い児童には他の切り方もさせる。</p> <p>【提案2について（よさやアドバイス、気付いたこと等、※改善点は質問形式で）</p> <p>○「うまくいくこつ（留意点一覧表）」は、耳の他に目で確認できるので、視覚からの方が理解しやすい児童により支援となった。いつでも確認可能なので、全員の支援にもなっていた。</p> <p>○教師の説明（言葉・示範）と「うまくいくこつ（留意点一覧表）」を結び付けて行った進め方は、2年生にとって理解しやすいとその後の児童の作業の様子を見て感じた。</p>						
<p>私の 提 案</p>	<p>5 切った紙を確認し、気付いたことを話し合う。</p> <p>6 「四分の一」について知る。 ◇同じ大きさに4つに分けた1つ、四分の一といい、1/4と書きます。 ◇1/4の定義と書き方をまとめ、用語「分数」を知らせる。</p> <p>7 1/4を理解したか確認する。</p> <p>① 1/4をいくつ集めると元の大きさになりますか。ノートに答えと理由を書きましょう。 ◇発表を通して考え方を共有する。</p> <p>② 1/4はいろいろあるのは、何が違うからですか。ノートに書きましょう。 ◇発表を通して考え方を共有する。</p> <p>◇同じ大きさに4つに切ったうちのピザ1つをなんと言いますか。</p>	<p>・ぴったり重なった</p> <p>・児童の紙や黒板に貼った紙も重ねて見がぴったり重なることを確認</p> <p>・単位分数の関係を確認し、組み合わせ際の支援とする。</p> <p>・児童の発表や反応を受けて柔軟に対応し、目標に迫ること</p> <p>提案3：本時のまとめや既習事項から「元の大きさ」、「同じ形」、「4つに分けた」、「ぴったり重なる」、「合わせる」をキーワードとする。 発表やつぶやきの中のキーワードを拾って反復したり強調したりするなどして活用を図り、理解の支援とするとともに誤答を活用して正しく理解できるようにする。</p> <p>◎①知識・理解（ノート） ◎②数学的な考え方（ノート）</p> <p>【提案について（よさやアドバイス、気付いたこと等、※改善点は質問形式で）</p> <p>○あらかじめキーワードを決めたことで、発表者にはなかったつぶやきを取り上げることにつながっていた。さらに、つぶやきを児童全体に戻していたことは、その言葉をイメージして考えたり、その言葉も使って説明しようとすることに役立っていた。 ※せっかくキーワードを準備したのだから、ノートの見取りの際に活かすと効率よく行うことができ、もっとたくさん児童の考えの見取りが可能になったのではないだろうか。 ○見取る際に、「○○ちゃん、いいね。」等と名前を入れながら考えのよさをクラスに広めていったやり方は、児童が安心感もち頑張りぞという気持ちになる上でよかったと思います。</p>	<p>校内研究と関連付けた授業 力向上の視点から私の提案を 記述（私の提案がある場合）</p>						
<p>終末 10分</p>	<p>8 適用問題に取り組む。</p> <p>9 今日の授業を振り返る。</p> <p>10「算数のおはなし」に取り組む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・習得した知識を活用し1/8を理解する。 ・分かったことを書く。 ・1/8作りに取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「長さ＝大きさ」であることを押さえ、分数の考え方が使えることを確認する。 ・分かったことや大事だと思うことを書くように声がけする。 ・3回半分に折って切るよう声がけする。 						
<p>【その他何でも】</p> <p>○板書が3分割で構成されていて内容を捉えやすかった。また、教師が選んだのもよかった。</p> <p>○学習した内容の要点を学習コーナーに掲示し増やしていくと、見えてよかったです。</p> <p>※ピザは円なので実際に4等分をするのは難しいと思います。長方形が一致するので、場面絵と教具がより結び付いて考えられたのではないかと感じました。</p> <p>○留意点の書き方が、参考になりました。</p> <p>成果一覧シートへの まとめを意識して学んだ ことを振り返る</p> <p>※提案部分で学んだことや気付いたことを、他の単元や他の教科で使えるように一般化を図るとしたらどのように書き表したらよいでしょうか。下記の欄に書き出してください。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="178 1798 549 1827">手だて（○）</th> <th data-bbox="549 1798 944 1827">手だての内容（・）</th> <th data-bbox="944 1798 1398 1827">指導上の留意点（◇）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="178 1827 549 1930">○児童の発表や反応を受けて柔軟に対応し、目標に迫る。</td> <td data-bbox="549 1827 944 1930">・発表やつぶやきの中のキーワードを拾って活用を図り、理解の支援とする。</td> <td data-bbox="944 1827 1398 1930">◇教材研究であらかじめキーワードを考え、準備して授業に臨む。 ◇キーワードを使っている児童をほめたり、まとめに用いたりして活用を促す。</td> </tr> </tbody> </table>				手だて（○）	手だての内容（・）	指導上の留意点（◇）	○児童の発表や反応を受けて柔軟に対応し、目標に迫る。	・発表やつぶやきの中のキーワードを拾って活用を図り、理解の支援とする。	◇教材研究であらかじめキーワードを考え、準備して授業に臨む。 ◇キーワードを使っている児童をほめたり、まとめに用いたりして活用を促す。
手だて（○）	手だての内容（・）	指導上の留意点（◇）							
○児童の発表や反応を受けて柔軟に対応し、目標に迫る。	・発表やつぶやきの中のキーワードを拾って活用を図り、理解の支援とする。	◇教材研究であらかじめキーワードを考え、準備して授業に臨む。 ◇キーワードを使っている児童をほめたり、まとめに用いたりして活用を促す。							

図11 指導案シートの例②（記入例）

指導案シートでは、授業力向上の取組を支援する工夫として、研究の視点に関する提案や私の提案部分の直近に、それらに関する参観者の気付きや学びを書く欄を設けた。これまでの学習指導案に、参観者の気付きや学びを整理して書き込む要素を盛り込むことで、参観者は提案と自分の気付きや学びを合わせて振り返ることができる(図10, 図11)。また、参観者がシートをコピーして授業者に渡すことで、事後検討会での学びの他に参観者の気付きや学びも授業者へ還元できる。さらに、指導案シートを使って学んだことを学びシートや成果一覧シートにまとめ、授業に活用しやすくなり、ファイルに綴じて学んだことの散逸を防ぎ、蓄積を容易にしたりすることもできる。

授業者は、指導案シートを作成する際、「参観者が提案部分を理解して、具体的に見取りやすいか」ということを考えながら、本時の指導について記述する。

「2 本時の指導」の「(2)本時の提案」には、校内研究の視点(仮説)に関する手だてを具体的に記述する。「(3)私の提案」には、授業者の授業力向上のための自己目標とそれを達成する上で必要な手だて、簡単な留意点を記述する。また、校内研究の視点(仮説)との関連や高めたい授業力についても、提案との関連を明記しておく。「(6)学習過程」は、主な学習の流れを記述した後、研究の視点に関する提案と私の提案の手だてを、予想される児童生徒の反応と指導上の留意点とともに記述する。特に提案部分の留意点として、目的に基づいて計画した手だてが最も効果を発揮するために気を付けたいことを具体的に書く必要がある。そのことが参観者の気付きや学びを促し、指導案シートに記述しやすくすることに役立つ。また記述内容は授業者に還元され、授業者も学びが充実することにつながる。その他、授業者のよさや提案に対する助言等を記述することは、授業実践への意欲を高めることにも役立つと考える。

本研究で紹介している指導案シートは一例であり、各学校で使用している指導案の書式や本研究の指導案シートの書式を改良し、自校化することも考えられる。

(2) 参観観点の検討(校内研究との関連: ガイダンス後~研究授業前)

自己目標に迫るために研究授業を有効活用するには、目的をもった参加の仕方が大切になる。そこで個々の教員は、指導案シートが配付されたら、自己目標に基づいて「研究授業のどの場面で何を見取るか」という参観観点の検討をしっかりと行い、指導案シートの指定欄に書き込んでおく。

研究授業を実施する際、事前検討会や模擬授業あるいは先行授業を行う場合がある。その際、個々の教員は書き込みをした指導案シートをもって参加する。話

学びシート		実施年度	平成 24 年度
職名	教諭	授業の場や学習活動など、見出しとなる用語を記述します。	
●授業を参観して学んだこと		※入力力は色の付いた部分のみです。	
分類	学んだ内容	自分の授業実践で成果を実感したこと等を記述・蓄積します。	
課題提示	既習の解き方や考え方を、いつでも見えるところに貼っておくと、個に対応した振り返りが可能になる。 つぶやきや課題への集中が促された。	<p>目次</p> <p>注意すること</p> <p>※1 学んだ内容の記述の後半が枠内に表示しきれなかったり、印刷できなかったりする場合には、そのセルに行を挿入してください。</p> <p>※2 このシートは、2枚目まであります。3枚目以降が必要な場合は、セルをコピーして使用してください。</p>	
ワークシート	ノートに貼り付けるようにプリントをつくることで、整理が苦手な子どもも教師の意図したノートをつくるのができていた。		
考えを引き出す場面の学習形態	ペアよりも人数の多いグループ活動を取り入れると多様な考えを引き出しやすい。		
声掛け	つぶやきを聞き逃さずに授業に反映させていく。 誤答に対しても「どんまい」「ありがとう」等の声掛けをすると、失敗したとか、どうしようといった感情をもたせずに授業を進められる。		
課題提示	具体物を提示する際には、その後の半具体の作業活動との類似性を考える。 具体物を提示したならば、最終場面で具体物に還す。		
板書	板書する際、「課題提示と見直し」「まとめ」「適用」など、授業の内容に応じて構造的に分割して計画立てておく。見やすく、分かりやすい板書となる。		
伝え合う場の設定	発表を聞く際、自分の考えと違う意見はメモするように常に声掛けし、習慣付けると聞く姿勢が高まることも、その意見を反映させた考え方もできるようになる。		
教材の工夫	実体験が不足していることについての学習では、身近な器具を用いて類似する現象を視覚と体感を通して伝えさせると効果的である。(加湿器を用いた気象の学習)		
見直しをもたせる場面	学習コーナーを設置して、ヒントを提示したり、既習内容の振り返りができるようにすると個に応じて見直しをもたせやすい。		
発問	子どもが理解しやすく、「考えてみよう」と思える発問にするために、子どもを十分に課題に引きつけた上で問いを発するようにするとよい。		
相互評価	相互評価はプラスの評価が多く書かれているため、最終段階で発表しあうと、学習後に達成感や充実感をもたせることができる。		
意図的指名	どういった意見をどの順番で発表させるのか、事前に計画しておき、机間指導をしながら誰に発表させるか決定するようにする。		

図12 学びシート(記入例 一部抜粋)

合いや参観を通して、自己目標に直接結び付く学びや、目標以外の授業力についての学びを得ることが考えられる。それを受け、必要に応じて参観観点の見直し・変更を行う。同時に、学びシート（図12）の「分類」と「学んだ内容」の欄に、その内容を記述する。「分類」は学んだことに対する小見出しの役割をもち、自分が活用しやすいように設定する。「学んだ内容」は、可能ならば目的と手だて、さらに留意点を1セットにして書いておくと、成果一覧シートにまとめやすくなり、何より授業で活用しやすくなるを考える。それは「学んだことの活用と振り返り」の取組を促し、授業力向上に役立つと考える。

なお、模擬授業や先行授業を実施する場合、研究主任は、授業力セルフチェックシートの診断項目で授業を参観する役割を担う教員を配置し、授業力を構成する5つの力の観点から参観して授業者に助言するような機会を設定すれば、特に授業者の授業力向上を支援するための有効な取組の1つとなることが考えられる。

(3) 授業参観（実践）（校内研究との関連：研究授業）

参観者は参観観点の他に、指導案シートの「(6) 学習過程」に書かれた「研究の視点（仮説）に関する提案」と「私の提案」を、予想される児童生徒の反応とその指導上の留意点の記述に基づいて授業を参観する。その際、記述欄に気付きや学び、よさを感じた指導技術、授業者の提案や工夫に対する助言や疑問、改善策等を記述することで、自分の授業づくりの際に役立ちそうな学びを増やし、「学んだことの活用と振り返り」の取組の充実につなげ、授業力向上に役立てる。

なお研究主任は、授業実践当日までに研究授業を参観する教員の中から、授業記録を担当する教員を割り当てる。授業記録は、事後に個々の教員が成果や課題及び改善策の検討を行う際や振り返りを行う際に活用する。

(4) 成果・課題・改善策の検討（校内研究との関連：事後検討会）

研究授業後の事後検討会は、2部構成としたい。前半は「研究の視点（仮説）に関する提案」について話し合う。各学校で行っている検討会に合わせた形で進める。その際、成果や課題及び改善策を明確に示し、授業や次回の研究授業に活かすようにすることが大切である。

後半は「個々の教員の振り返り・見直し・計画」の時間を設定することで、意欲の向上と取組の継続を図りたい。振り返りシート（次頁図13）と教科書等を使いながら20分程度で行う。研究授業を中心に個々の教員がそれまでの取組と自己目標を照らし合わせて振り返り、学びを活用するための見直しをもち、計画を立てる時間として設定したい。振り返ることで自己目標に迫るための気付きや学びが整理され、目標達成に向けた取組が促進されるのではないかと考える。

さらに、学んだことを活用し振り返るために教員全員が「授業を見合う計画」を立てる。

ワークショップでは視点や手だてに関する話合いが中心となるため、参観者は視点以外での授業者のよさや助言、あるいは授業者に聞いてみたい点を出せずにいる可能性が考えられる。それらを、授業者の学びや励みとなるよう付箋紙に書き、台紙にまとめて渡したい。

ただし、書く際には、授業者が「また、授業を公開してみたい」と思えるように留意して表現することが大切である。例えば、授業者のよさを多く書くようにしたり、よさとともに助言も行ったりする。改善策や課題と思われる点を書く場合は、「指摘」や「決め付け」といった文章表現にするのではなく、授業者に再考を促すような質問形式で書くようにする。また、17頁図10の「提案1について」の参観者の記述欄に、「『1/4』という声が聞こえてきていたので、その意味を発表させてから本当にそうなるのか確かめていくような指導案にはない臨機応変な進め方をしていたらどうなっていたでしょうか。」という授業者に対して再考を促すような記述がある。このような書き方であれば、授業者は進め方を再考したり記述者と改善策を見出すために話し合ったりして今後も前向きに取り組むことが可能になると考える。事後検討会後の「授業を見合う」取組の際に使用する見合いシートもこのような点に留意して書きたい。授業者が意欲を持続できるように配慮することで、自己目標の達成に向け、「学んだことの活用と振り返り」の取組が主体的に行われるようになる。と考える。

振り返りシート									
職名	教諭	氏名	青葉 太郎			実施年度	平成 24 年度		
●授業を参観して、他の教員から学んだ教授方法や考え方等									
記入日	11 月 27 日		参観した授業	3年 数学「2次方程式」					
学んだこと (自分の参観観点に基づく学び・気づき等)	分類	学んだ内容							
	課題提示	<ul style="list-style-type: none"> 既習の解き方や考え方を、いつでも見えるところに貼っておくと、個に対応した振り返りが可能になる。 つぶやきや課題への集中が促された。 							
	ワークシート	<ul style="list-style-type: none"> ノートに貼り付けるようにプリントをつくることで、整理が苦手な子どもも教師の意図したノートをつくることができていた。 							
	指示	<ul style="list-style-type: none"> キーワードを設定し、発表やつぶやきからそれを引き出す。 							
	声掛け	<ul style="list-style-type: none"> つぶやきを聞き逃さずに授業に反映させていく。 誤答に対しても「どんまい」「ありがとう」等の声掛けをすると、失敗したとか、どうしようといった感情をもたせずに授業を進められる。 具体物を提示する際には、その後の半具体の作業活動との類似性を考える。 具体物を提示したならば、最終場面で具体物にかえす。 							
課題提示									
<p style="text-align: center;">授業を参観して学んだことを校内研究の視点(手だて)と結び付けて実践</p>									
●今後の授業実践(授業の見合い)で取り組みたい手だて									
段階	学習の場面と手だて(○)	手だての内容(・)				指導上の留意点(◇) (手だてが最も効果を発揮するために気を付きたいこと)			
展開	学習のまとめ ○自分の考えを深め、高め合う場の工夫	・キーワードを設定し、発表やつぶやきからそれを引き出す。				◇キーワードを反復したり、強調したりする。 ◇誤答を活用する。			
<p style="text-align: center;">校内研究の視点(手だて)から記述</p>									
●今後の授業実践(授業の見合い)の計画 ※持参した教科書等を使って検討									
授業で実践したい内容	自分の考えを深め、高め合う場での指示の在り方								
実施教科(領域)	算数					でおこないたい。			
実践単元	「分けた大きさをあらわそう(分数)」					の第 2 時あたり			
<p style="text-align: center;">自己目標とした項目との関連も考慮する。</p>									
●高めたい授業力に関する自己目標の達成状況									
校内研究で取り組む項目					校内研究で取り組む				
取り組み中の項目(キーワードのみ)		発問, 指示			取り組み中の項目(キーワードのみ)		教材や資料の分析		
STEP1	○	STEP2	△	目標	×	STEP1	◎	STEP2	○
※STEP1, STEP2, 目標(自己目標)の達成状況は, ◎, ○, △, ×で記入する。									

図13 振り返りシート(記入例)

(5) 振り返り・見通し・計画(校内研究との関連:事後検討会)

個々の教員は、事後検討会までの取組を通して学んだことを振り返りシートに書き込んでいく。ここでの学びは、授業を参観して見取った授業者の見習うべき所作や指導技術、教授方法等に加え、事後検討会での話合いで得られた成果や課題及び改善策等を指す。それらを、授業の場面や学習活動等の用語を見出しとして分類の欄に書き込みながらまとめる。最終的には成果一覧シートにまとめ、授業で活用しやすくする。

次に、個々の教員は授業力の向上を目指して振り返りシートに記述した学びの活用を考え、今後の授業実践の見通しと計画を立案していくことになる。あくまでも個々の教員による実践が中心となるが、個々の教員を支援するために学年・教科等でグループを組み、情報交換をしながら行うことも考えられる。

このような方法で今後の授業実践計画を立案する際には、教科書や年間指導計画等を持ち寄ることで、具体的な見通しや他の教員との情報交換がしやすくなる。情報交換の際は、自己目標や活用したい学びを共有したり、授業を見合う実施時期を調整したりする。特に、自己目標に迫

る手だてや学びによっては、用いることが可能な単元や題材まで多少時期を置かねばならないことも考えられる。その場合はグループでも調整を図るが、研究主任が授業を見合う期間を柔軟に設定したり、授業者と相談して実施時期を決めたりすることで解決を図ることが望ましい。実施時期が決まったら、個々の教員ごとかまたは代表者がとりまとめて研究主任に報告する。なお、情報交換は、できるだけ自由な雰囲気の中で行い、個々の教員の自由な発想を引き出したい。

個々の教員は、振り返りシートで自己目標達成のために設定した2段階のスモールステップに対する現時点の達成度を4段階（◎：十分に達成できている，○：達成できている，△：あまり達成できていない，×：全く達成できていない）で記入する。また、目標設定シートや目標実現シートの記述をさらに具体化したり、達成状況に応じてスモールステップの内容や手だてを見直したりして、新たな見直しをもって授業力向上のための取組が継続するようにする。

(6) 授業を見合うこと（校内研究との関連：事後検討会後～次の研究授業）

研究主任は、授業の見合いに当たって、学年・教科等の計画を受けて、授業の見合いの全体計画を立てる。その際、次の研究授業までの間に、学年・教科等が余裕をもって授業の見合いを進められるように期間を設定する。さらに、予定表を作成し校内LANや掲示物等で個々の教員に周知する。予定表には、次の3点について記述する。

- ・授業公開の期日、校時、学級名
- ・単元（題材名）、提案の概要
- ・授業者の自己目標や本時に関わるスモールステップの内容、手だて

予定表を作成し個々の教員に周知することで、学年・教科等の枠組みを超え個々の教員の興味・関心や課題意識による主体的な参観を促すことが期待できる。

個々の教員は、見合いシート（図14）を使用しながら授業を見合う。

算数学習指導案シート		(5) 学習過程の提案部分	
平成○年○月○日(○)○校時 場所 ○年○組教室 指導者 □□ □□		提案部分に関する学習部分 (◇)主な発問	
1 単元名 「分けた大きさをあらわそう(分数)」 2 本時の指導 (1) 目標 四半分にした大きさを四分の一といい、 $\frac{1}{4}$ と書くことを理解する。 (2) 私の提案【関連：研究の視点3 向上させたい授業力：授業実践力】 キーワードを設定し、それを基に教員が発表やつぶやきの中のキーワードを活用したり、誤答を活用したりして理解の支援とする。 【視点3】自分の考えを深め、高め合う場の工夫 【自己目標】児童の発表や反応を受けて柔軟に対応し、ねらいに迫る。 (3) 評価 ・1/4の大きさは、もとの大きさによっていろいろあることに気付いている。(数学的思考 ノート) ・四半分に分けた一つ分をもとの大きさの四分の一といい、 $\frac{1}{4}$ と書くことを理解している。(知識・理解、ノート)		指導上の留意点 (※は評価の観点) 【私の提案】 児童の発表や反応を受けて柔軟に対応し、ねらいに迫る。 ※知識・理解 (ノート) 【提案】本時のまとめや既習事項から「元の大きさ」「同じ形」「4つに分けた」「ぴったり重なる」「合わせる」をキーワードとする。 発表やつぶやきの中のキーワードを拾って反復したり強調したりする等して活用を図り、理解の支援とするとともに、誤答を活用して正しく理解できるようにする。	
(4) 主な学習の流れ 主な学習の流れ (太字：提案部分)		指導上の主な留意点 (※：評価 ◎：提案部分) 1 既習内容と4等分することを比べ、学習内容に関心を高める。 2 問題文を読み題意をつかむ。 長方形の紙を半分の半分において切りましょう。 3 折り方や学習の進め方を確認する。 4 各自長方形の紙を折って切る。 5 切った紙を確認し、気付いたことを話し合う。 6 「四分の一」について知る。 同じ大きさに4つに分けた一つ分を、もとの大きさの四分の一といい、 $\frac{1}{4}$ と書く。	
7 $\frac{1}{4}$ を理解したか確認する。		授業者は、提案することを1つに絞って記述する	
8 適用問題に取り組む。 9 今日の授業を振り返る。 10 「算数のおはなし」に取り組む。		【提案について(よさやアドバイス、気付いたこと等)改善点については質問形式で] ○あらかじめキーワードを決めたことで、発表者にはなかったつぶやきを取り上げることにつながっていた。さらに、つぶやきを見直し全体に戻していたことは、その言葉イメージして考えたり、その言葉も使って説明しようとして役に立っていた。 ※せっかくキーワードを準備したのだから、もっとたくさんの児童の見取りが可能なようになっていないだろうか。いかがですか。 ○見取りの際に、「○○ちゃん、いいね、めいめいやり方は、児童が安心感よかったです。」 【その他なんでも】 ○教室が3分割で構成されていて内容が視覚的に整理されたのも、学習した内容の発表を練習コーナーを参考に考えることができてよかったです。 ※提案部分で学んだことや気付いたこと、変化を図るとしたらどのように書き直しましょう。 手だて(○) ○児童の発表や反応を受けて柔軟に対応し目標に迫る。 手だての内 ○発表やつぶやきの中からキーワードを拾って活用を図り、理解の支援とする。 指導上の留意点(◇) ◇キーワードを使っている児童をほめたり、まどめに用いたりして活用を促す。	

図14 見合いシート（書式・記入例）

その際、授業者は提案することを1つに絞り、場面を限定した短時間での参観が可能となるようにする。これにより、授業者と参観者の負担感を軽減し、授業を見合う期間内に個々の教員が「学んだことの活用と振り返り」に、複数回取り組むことを目指したい。これは、学んだことをより多く身に付け、授業力向上を図るための工夫である。また、互いの提案等に対してよさを認め合い、助言し合うことでも、学び続ける意欲の持続を図るようにする。

参観者は、参観後に見合いシートをコピーして授業者に渡す。これにより、短時間の授業の見合いでも、参観者や授業者が学びや気づき等を記録・蓄積できるようにする。さらに、見合いシートをきっかけとして、授業の話題が日常的に教員間でできるような環境づくりも心掛けたい。

授業の見合いは、次の①～③の目的で行う。

- ① 研究授業の参観、事後検討会を通して学んだことや自分の授業に取り入れてみたいと思ったこと等を一般化した上で実際の授業の場面で実践し、その効果を検証するため
- ② 研究授業の事後検討で話し合われた改善策を一般化した上で実際の授業の場面で実践し、その効果を検証するため
- ③ 校内研究と関連付けられた個々の教員による授業力向上のための自己目標を達成する目的で手だてを工夫した場合に、その効果を検証するため

これまでの取組で、高めたい授業力と校内研究との関連付けが難しい場合は、学年・教科等の話し合いや研究主任の助言等で関連付けできるように働き掛けてきた。しかし、校内研究と関連付けをすることが難しい場合がある。その状況でも手だてを考え、他の教員に参観してもらって効果を検証したい。自ら授業の見合いを同僚に周知して参加を募り、自主的な学習グループをつくったり、スポット研修や学年会、教科部会で話題にしたりすることで、目標達成に迫っていくようにする。

5. 3. 3 授業力向上のための学びを記録し、蓄積すること（校内研究との関連：通年）

個々の教員は、ここまでの取組で自己目標や興味・関心、有用感に応じて気づきや学びを記録・蓄積してきている。授業の見合い後も同様に振り返りを行い、学びシートに新たな学びを書き加える。その学びの中から、一般化して表せるものは成果一覧シート（図15）に成果としてまとめ、授業で活用し授業の改善を図る。成果一覧シートは、「段階」「学習の場面と手だて」「手だての内容」「指導上の留意点」の4つの項目でまとめる。4つの項目でまとめることにより、手だてがその具体的内容と指導上の留意点とともに記され、活用しやすい形式となる。また、成果を得た時に順番を気にすることなく空欄に入力しても、後日、段階ごとにデータを整理することも可能である。

合わせて目標実現シートを活用し、次回の実践に向けた自己目標や中間目標等を見直して目標の継

成果一覧シート		※入力は色の付いた部分のみです。	
職名	教諭	氏名	青葉 太郎
実施年度		平成 24 年度	
教科		算数	
●授業を参観して学んだことや自分の授業実践で成果を実感したこと等から成果一覧表を作成します。			
段階	学習の場面と手だて(○)	手だての内容(・)	指導上の留意点(◇) (手だてが最も効果を発揮するために何を付けたこと)
導入	○生活場面と学習内容を結び付け関心を高める。	・問題文につながる場面絵を用いる。	◇場面絵を用いて児童を引き付けるとともに具体的な問題場面が正確に捉えさせるようにする。課題解決後に場面絵に戻り、学習内容を生活場面につなぐ。
導入	◇課題設定場面 ○既習事項を活用し、必要感のある課題設定をする。	・これまでの学習内容との相違点や共通点に気付かせる。	◇問題文に取り組ませる際に既習事項との違いや既習事項を使えば解けそうかという興味・関心や必要感、切実感から課題設定すると解決意欲が高まった。
導入	○多様な考え方ができる課題設定をする。	・多様な考えを比較・整理・まとめることを通じて、段階的に理解できるようにする。	◇可能な限り多様な考え方ができる課題設定を行い、児童に応じた解決の見通しと解決後に自分の考えをもつことができるようにする。
展開	◇見通しをもつ場面 ○解決の見通しをもたせる時間を設定する。	・既習事項を活用し、児童一人一人に解決の見通しをもたせる。	◇見通しをもつことができない児童が多い場合、下記の3点に留意する。 ①前時の学習内容や活用できそうな既習事項を想起させる。 ②学習コーナーの掲示内容に着目して考えるようにさせる。 ③見通しをもつことができた児童の考えを紹介する。
展開	○学習コーナーの掲示内容を活用する。	・児童が見通しや考えをもつことができない場合、学習コーナーをヒントの1つとする。	◇見通しや考えをもつ場面、学習を振り返ったりする時にいつでも児童が活用できるように、学習の進度に合わせて掲示内容を増やしていくようにする。

図15 成果一覧シート（記入例 一部抜粋）

続や修正の判断をしたりする。判断が難しい場合は、学年・教科等の同僚や研究主任に相談する。

5. 3. 4 授業力向上のための取組の成果等を共有すること（校内研究との関連：研修日等）

事後検討会や学年・教科等での話合いで、授業力向上に結び付きや学びは共有されてきた。

授業の見合い後も同様に気付きや学びの共有を図る。学年・教科等は、定例会や研修日を活用して、授業の見合いの実践報告のための時間を設定する（実践報告会）。自他の気付きや学びを共有するとともによさを認め、助言を得て、次の授業力向上の取組へ意欲を高めるためである。その場では、成果一覧シートを用いる。学んだことの活用と振り返りが繰り返され、成果一覧シートには個人差はあるものの一般化された学びが蓄積されていると考える。

常に学ぶ機会を設定することで、日常的に授業のことが話題に上り、考え方や指導技術等が継承されていくように配慮したい。

研究主任は、授業の見合いが終わるごとに成果一覧シートを集め、全員で閲覧してより多くの成果を共有し、個々の教員が自己目標に迫ることができるようにするとともに、学校全体の授業力向上も図りたい。

5. 3. 5 年度末に授業力の向上を確認する場面を設定すること

(1) まとめ・活用（校内研究との関連：研究のまとめ）

年度末の校内研究のまとめの時期に合わせて、個々の教員は、自分の授業力の向上を確認する。その前段階として、これまでの取組を通して記録・蓄積した学びを再度確認する必要があると考える。ここまで個々の教員は、「学んだことの活用と振り返り」を繰り返しながら、その都度、学んだことを成果一覧シートにまとめてきている。その他、この段階までに研究授業と授業の見合いで参観者として使用した指導案シートと見合いシートをファイリングしている。また、授業者としての提案を含めた研究授業と授業の見合いを実践し、他の教員からの授業に対する助言もファイリングしている。さらには、様々な場面で自分の課題や解決テーマに直接的に結び付きや学びや、それ以外の授業力に関する学びをメモ的に蓄積した学びシートをもっている。これらを総合的に振り返って、目標とする授業づくりを進める上で工夫された手だてを、具体的内容と教員が留意すべき事項とともに成果一覧シートにまとめたい。

(2) セルフチェック（校内研究との関連：研究のまとめ）

個々の教員は、記録・蓄積した学びの再確認後に、授業力セルフチェックシートを使って2回目のセルフチェックを行う（図16）。

その結果はまとめシートに反映される（次頁図17）。比較・検討に活用できるのは、「分類ごとの平均」とその変化を表した「レーダーチャート」「評価値ごとの診断項目数」とその1回目と2回目の値の変化を表した「折れ線グラフ」の4点である。

授業力セルフチェックシート				実施年度	平成 24 年度
職名	教諭	氏名	青葉 太郎	評価は10段階で行います。(半角数字で入力) ※評価の基準を参考にしてください。	
番号	分類	診断項目	評価		主な評価の観点
			1回目	2回目	
1	児童生徒理解力	児童生徒の学習意欲をいろいろな見方で把握しようと努めている。	5	5	・挙手やしぐさ、活動の様子等から、意欲を把握しようとしているか。 ・学習意欲を促進したり阻害したりする外的な要因を分析しているか。
2		児童生徒の学習内容の定着状況を把握しようと努めている。	3	5	・学習の様子、記述内容や提出物等から学習の定着状況を把握しているか。 ・評価を累積し、学習の定着状況を把握しているか。
3		児童生徒の発言や行動等を共感的に受け止めている。	3	5	・発達段階、友達関係、家庭状況等を把握しているか。 ・一人一人の発言を大切に考え、傾聴の意識をもってしているか。 ・一人一人に気を配り、言葉かけを工夫しているか。
4	教材解釈力	授業に用いる教材や資料の分析を行っている。	3	5	・教科等の専門知識を深めるため、書籍や研修等で研さんを入れているか。 ・日頃から教材に関連する幅広い情報の収集に努めているか。
5		児童生徒の実態を考慮して教材解釈をしている。	6	6	・興味・関心をもち、学習意欲を高めるようしている。 ・普段の生活の様子等を考慮するようしている。
6		ねらいや実態に合う教具や資料を選択したり、開発したりしている。	6	6	・児童生徒の実態や学習のねらいを明確にした上で教材解釈をするようしている。 ・学年や教科、校種間の系統性を意識するようしている。
7	授業	単元や各時間のねらいを明確にして指導計画を立案している。	5	5	・児童生徒の実態等を考慮して、時数、活動内容、学習形態等の指導計画を立てているか。 ・児童生徒の実態等を考慮して、適切な時間配分を行うようしているか。
					・学習内容に応じて進め方や形態を工夫しているか。

図16 2回目の授業力セルフチェック（記入例 一部抜粋）

5. 3. 6 スポット研修について（資料「スポット研修の進め方」参照）

授業力向上の取組を進めているうちに悩みや新たな課題を抱えたり、高めたい授業力を校内研究と関連付けることができず個人で進めたものの思うようにはいかなかったりすることが予想される。そこで、本研究では、個人の課題や悩みにも柔軟に対応するスポット研修を行うことを提言する。研究主任の企画・提案に加えて、個人の企画・提案も個々の教員の授業力向上に結び付くと判断できるものについては、研究主任はその実施に向けて柔軟に対応していくことが必要である。

(1) 研修内容

研修内容は、校内研究の内容に関わるものと、関わらないものの2つに分けられる。できるだけ具体例を取り上げてそれぞれの思いや考えを自由に話し合えるものとし、個々の教員の課題や悩みに直接的に結び付くように計画したい。例えばスポット研修具体例No.4（資料「スポット研修の進め方」参照）では、「教材解釈をしてみよう」という研修を計画し、文章教材やワークシートを準備し、互いの解釈について意見交換する流れを提示した。短い時間ではあるが、実際の教材を通して解釈をし、意見交換することで、教材解釈力の具体的に身に付けたい力が見えてくると考えた。年間予定として計画する研修もあるが、校内研究を進める中で個人の企画・提案に基づいて行う研修があってもよいと考える。研究主任が個々の教員の意向や様子から、適宜計画することが望ましい。

(2) 研修形態

研修形態については、研修内容によって使い分けることが大切である。特にグループ研修を行う場合は、表5に示したように大きく3つのグループ分けが考えられる。学年・教科等については、普段から定例会をもつ等し、集まりやすさや話しやすさの点から設定しやすい。

授業力課題別・希望別では、個々の教員が同じ課題を共有することで話し合いが進めやすいと考える。

また、教職経験年数の異なる集団別では、経験年数によって見方や感じ方が違い、そのことが互いによい影響を与え、話し合いが活性化すると考える。

表5 グループ研修を行う場合のグループ分け

グループの形態	グループの利点
○学年・教科等別	時間の融通が利くため一番集まりやすく、話し合いを設定しやすいグループである。
○授業力課題別・希望別	同じ課題をもつ教員のグループとなり、話し合いが進めやすい。
○教職経験年数の異なる集団別	経験年数によって感じる課題が違い、互いによい影響を与える。

※研究主任が、授業力セルフチェックシート、目標設定シート等から実態を把握し、話し合いが活性化するように意図的にグループ分けを行うことも考えられる。

(3) 進め方のポイント

進め方の一番のポイントとして、話し合いを進めるファシリテーターの役割が重要となる。研修内容や研修形態を考えることはもちろんであるが、有意義な話し合いから個々の教員が多くの学びを得ることができるようにすることが大切である。個々の教員がそれぞれにファシリテーターとしての技量を高めようとするのが大切であるが、研修内容や研修形態によっては、研究主任が意図的に指名し、話し合いを進めるようにすることも必要である。次頁表6は、ファシリテーターに求められる4つのスキル¹⁰を表したものである。この4つのスキルを基に、本研究ではファシリテーター役の教員が留意することを次頁図18のようにまとめた。

10 ファシリテーターに求められる4つのスキルとは、「ファシリテーション」（堀公俊 日経文庫 2004）による

表6 ファシリテーターに求められる4つのスキル

スキル	主な内容
1. 場のデザインのスキル (場をつくり, つなげる)	<ul style="list-style-type: none"> ・場を確保し, 使用する物品を準備する (話し合いに必要な物)。 ・話し合いのルールを決める。 ・話しやすい雰囲気をつくる。
2. 対人関係のスキル (受け止め, 引き出す)	<ul style="list-style-type: none"> ・共感しながら傾聴する。 ・質問で話し合いを深める。 ・参加者の様子から思いを推察する。 ・話をつないで広げる。
3. 構造化のスキル (かみ合わせ, 整理する)	<ul style="list-style-type: none"> ・筋道を立てて話し合いを進める。 ・出された意見や考えを見える形にしていく (図化する等)。
4. 合意形成のスキル (まとめて, 分かち合う)	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いをまとめる。 ・まとめたものを全員で振り返り, 共有する。

○意見を出しやすい雰囲気づくりに努め, 参加者が気軽に話し合えるように環境を整える。

○話し合いのルールを確認する。

(例)

- ・全員が必ず発表する (時間を決める)。
- ・それぞれの発表を共感的に受け止める (批判しない)。
- ・思ったことを素直に本音で語る。
- ・無理に方向性を決めたり, まとめたりしない。

○話し合いの目的とゴールを決め, 参加者に確認をする (黒板やホワイトボードに書き出す)。

○参加者の話をよく聞いて引き出すようにする (話題を広げていく)。

○目的から外れないようにリードし, 話し合いを整理していく。

○振り返りの時間を設けて, 気づきや学びをそれぞれが整理できるようにする。

○必要に応じて, 時間係や記録係を決める。

図18 ファシリテーター役の教員が留意すること

5. 4 研究主任の役割

研究主任は, 個々の教員が授業力向上の取組を校内研究と関連付けて進められるように, 運営の中心的な役割を担う。その際, 授業力向上の取組を校内研究と関連付けて円滑に実施するために, 校長, 教頭, 教務主任, 研究推進委員会等との連絡を密にしながら研究推進を図ることが大切である。さらに, 常に個々の教員の活動状況の把握に努め, 支援や連絡調整に当たりたい。ここでは, 授業力向上の取組を校内研究と関連付けて実施するに当たっての研究主任の役割について述べる。

5. 4. 1 授業力向上の取組を校内研究と関連付けて実施するために

表7の☆印で示した部分は, 研究主任の新たな役割である。スポット研修を行う場合は, 校長, 教頭, 教務主任等と事前に十分研修の内容を協議しておくことが大切である。

表7 研究主任の計画実施に関する役割

研究主任の主な仕事	内容
研究主題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・県や市町村の施策, 各種調査 (実態調査等), 地域や保護者の願い, 教師の願い, これまでの研究の成果と課題等から考え提案する。 ☆個々の教員が取り組みたい課題を集約し, 研究主題の設定に活かす。
研究組織・研究推進計画の作成	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような組織でどのように取り組んでいくのかを明確に表し, 提示する。 ☆個々の教員の授業力向上の取組を研究授業の取組に合わせて明記する。

研究全体会の運営	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研究に関する取組の中で成果と課題及び改善策等を共有するために開催する。 ☆個々の教員による授業力向上のための話合いや「授業力向上支援シート」を使って、目標設定や見直しをもつための時間を設定する。
研究授業の取組	<ul style="list-style-type: none"> ・計画的に授業実践を実施し、学びを得ていく。 ☆学んだことの見意見交換ができるように場の設定をする。 ☆学びシートや成果一覧シートに学んだことを蓄積したり、授業の見合いを設定したりする。
関係資料の調査・収集	<ul style="list-style-type: none"> ・先行研究や先進校の実践、参考文献、各種研修会資料等を収集し、機会を捉えて配付、紹介する。 ☆スポット研修を計画し、実施する。
研究のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の取組を最後に研究紀要等の形式でまとめる。 ☆個々の教員による授業力向上の取組のまとめをし、取組が次年度につながるようにする。

(1) 研究主題の設定に当たって

個々の教員の目標と研究主題が結び付いているほど、研究を進めるに当たって教員の意欲が増すと考える。そこで、研究主任は研究主題の設定に当たって、個々の教員が取り組みたい課題を集約して、その要素を反映させるようにしたい。反映できない課題については次年度の設定の際に考慮したり、スポット研修で取り上げたりして、授業力向上に向けた意欲を大切にしたい。

(2) 個々の教員の授業力向上の取組を進めるに当たって

授業力向上の取組を進めるに当たっては、個々の教員が授業力の課題を明らかにして、課題の解決のための手だてと校内研究の視点（仮説）を関連付け、自己目標をもって取り組んでいくことを、全教員で共通理解することが重要である。そのために、研究全体会等を利用して年度始にガイダンスを行いたい。説明では、本研究で作成した「ガイダンス用プレゼンテーション資料」を使用する。

また、「授業力向上支援シート」は、シートによって書式が違うので、取組を円滑に進めるために使い方や記入の仕方を活用前に全教員で共通理解することが必要である。

(3) 研究全体会の運営に当たって

研究全体会の運営に当たっては(2)で述べた共通理解を図る他に、個々の教員が自己目標を設定する時間を確保する。設定に当たっては授業力セルフチェックシート、目標設定シート、目標実現シートを用いる。その際、高めたい授業力と校内研究の取組との関連付けが難しい場合がある。そこで、学年・教科等のグループあるいは研究主任が相談に乗って、関連付けができるように支援する。特に教職経験年数が少ない教員については、関連付けの他に目標設定の仕方が適切かどうかを確認し必要に応じて助言する。また、手だてについては、取組を進める中で徐々に具体化すればよい旨を告げて、時間内にこれらの取組が終わるようにする。

終了後、全員の目標実現シートを集めて、課題としている授業力の傾向を把握したり、全教員で各々の自己目標を共有するための周知をしたりする。

(4) 共有のための場の設定に当たって

個々の教員が授業力向上の取組で得た成果を共有することで、自分の取組以外からも学びが得られるようにし、自己目標の達成につなげたい。そこで、学年・教科等といったグループでの定例会や全教員が参加する事後検討会、研究全体会あるいはスポット研修といった場を共有のためにも活用したい。その際、学びシートや成果一覧シートを用いて話し合ったり回覧したりすると、具体的な学びを得ることにつながると思われる。

また、共有の場では成果ばかりではなく、取組を進めることで生じた悩みや課題あるいは個人で取組を進める上で困ったこと等についても話し合うようにする。悩みや課題の軽減化が図られることで取組の継続を促したり、教員間での日常的な声掛けにつながったりすると思われる。

(5) 授業の見合いの設定に当たって

研究主任は事後検討会終了後、次の研究授業までの間に授業を見合う期間を設定する。その際、各学年・教科等が余裕をもって計画を組めるようにする。さらに、予定表に授業者の課題や提案の概要等を入れて作成し、校内LANや研究通信等で個々の教員に周知する。学年・教科等の枠組みを越え、個々の教員の興味・関心や課題意識による主体的な参観を促すようにすることが大切である。

また、授業の見合い期間の終了後には、学年・教科等の定例会や研修日を利用して、学んだことを学びシートや指導案シート、見合いシート、成果一覧シートを活用して、整理したりまとめたりするよう周知したい。

(6) スポット研修の設定に当たって

研究主任は、個々の教員の授業力向上の取組状況を、シートや声掛け等を通じて把握するように努める。その際、個々の教員が抱える課題や悩みについては、学年・教科等の定例会を利用したり研究主任が相談に乗ったりして解決を図る。教員間で共通の課題や悩みが多いと感じた場合は、スポット研修を計画して解決や軽減化を図る。また、校内研究と関連付かない自己目標で取り組んでいる教員が仲間を募ってスポット研修を行う場合は、事前の申し出を受け、内容が校内研究と関連付くか再検討する。関連付く場合は、全教員に周知して参加を促し授業力向上のための学びを得る機会とする。実施の可否に関わらず、校長、教頭、教務主任等と十分に協議しておくことが大切である。

(7) 個々の教員の授業力向上の取組のまとめに当たって

個々の教員の授業力向上の取組のまとめを年度末に行う。その際、「改善の方向性」については、「いつ」「何を」「どこで」「どうするか」ということが分かる書き方をしたり、具体的に手だて等を書いたりするように声掛けする。具体的に書くことで、次年度の個々の教員による授業力向上の取組が、本年度よりもスムーズに始められる。

また、成果一覧シートは集めて冊子として全員に配付すれば改めて見直し、学びを得ることにつながったり授業で活用したりすることが期待できる。次年度には冊子を新しく転入してきた職員に配ることで、これまでの授業力向上の取組を理解してもらうことに役立てたり、授業に活用してもらったりするようにしたい。

5. 4. 2 実践に当たってのポイント

(1) 研修を進める上での雰囲気づくり

「みんなで話し合える雰囲気」をつくることが大切である。そうした雰囲気をつくることで、児童生徒や授業についての日頃からの思いや悩みということについても、自然に話題に出てくるようになる。研究主任は、様々な話題で「みんなで話し合える雰囲気」づくりを働き掛けていく必要がある。

また、研究や授業力に関するいろいろな取組や情報を共有することも大切である。研究への前向きな雰囲気をつくるために、研究主任は情報収集に努め、様々な情報を得て話題を提供したい。さらに、研究を推進するために研究通信を発行する。発行する際には、授業者のよさを認め、研究の成果や次回の研究授業までの道筋を示す等、取り上げる内容や伝え方を工夫したい。

(2) ガイダンスの重要性

校内研究のスタート時には、個々の教員が課題の解決のための手だてを校内研究の視点（仮説）と関連付けて、自己目標をもって校内研究に取り組みながら授業力向上を図る必要性をガイダンスで説明し、全教員で共有する。その際、「ガイダンス用プレゼンテーション資料」を活用する。

ガイダンスの中で個々の教員が取り組むシートは、授業力セルフチェックシートや目標設定シートである。自分の授業力をセルフチェックシートで把握し、校内研究と関連させ、どのように取り組んでいくのか考え、自己目標を設定していく。シート類を活用し、自己目標を明確にすることが大切である。説明は、丁寧に分かりやすくし、時間に余裕をもって取り組めるようにしたい。ガイ

ダンスをしっかりと行うことが、この後の取組の充実につながる。

(3) グループ形態の工夫

グループの形態を工夫し、個々の教員が力を合わせて授業力向上の取組を進める。グループの形態は、大きく分けて3つが考えられる(26頁表5)。グループの形態を工夫することで互いに情報交換し、個々の教員が授業力向上のために意欲的に取り組むきっかけになると考える。研修内容によってグループを学年・教科等別や教職経験年数の異なる集団別にしたり授業力課題・希望別にしたりと形態を使い分け、研修の目的が達成されるようにする。また、グループ分けに関しての調整については、研究主任がその役を担う。

(4) シート類の取扱いと活用

個々の教員が授業力向上の取組を進めるためには、シート類の活用が大切となる。個々の教員が学びを蓄積し活用しながら、共有することでさらに学びを得ることができる。教員同士が互いのよさに気付いたり、「〇〇先生の実践を真似てみよう」「これはいい」と学びのよい循環が生まれたりすることも期待できる。

研究主任は、表8に表したように個人情報を含むシート類の取扱いに気を付け、個々の教員が授業力向上の取組を継続できるように支援する必要がある。そこで、研究主任は目標実現シートや学びシート、成果一覧シートを必要に応じて集めて、目標や進捗状況等を把握し、個々の教員への必要に応じた声掛けの材料としたりスポット研修の内容を検討するための実態把握等に活用したりする。目標や進捗状況等は、グループ分けをする際の意図的な編成に役立つと考える。さらに、個々の教員の高めたい授業力を集計することで、全体の傾向をつかみ、支援するための校内研修を計画することにも役立つ。年度末の再評価から、授業力向上がどの程度図られたかをつかむこともできる。

表8 シート類の取扱いと活用

シート名称	取扱い(○)と活用(□)
授業力セルフチェックシート	○個人の評価、数値等の情報が入っているので取扱いに注意する。
目標設定シート	□個人の授業力の分析状況や課題意識を把握し、校内研究の運営に活かす。
目標実現シート	○パソコン、ファイリングの両面が考えられる。いずれにせよ、日常から情報交換資料として共有できるようにする。
学びシート	○「学びの活用と振り返り」を繰り返す際に活かす。(事後検討会、授業の見合い、スポット研修等)
指導案シート	□校内研究と個々の教員の授業力向上の取組状況を把握する。
見合いシート	□研究通信等で実践を紹介する際に活かす。
振り返りシート	○個人の評価、数値等の情報が入っているので取扱いに注意する。
成果一覧シート	□個人の授業力の分析状況や課題意識を把握し、次年度の校内研究の運営に活かす。
まとめシート	

(5) 授業力向上を校内研究と関連付けた取組の導入に当たって

本研究の授業力向上の取組を導入する際、各学校の校内研究の進め方に合わせて「授業力向上支援シート」を自校化したり取組を選択したりして行うことが考えられる。「学んだことの活用と振り返り」が定着するように「ガイダンス」「現状把握」「関連付け」「目標設定」の4つの取組を行うように留意したい。これにより、課題と校内研究が関連付き、自己目標を設定して校内研究に参加しながら授業力の向上を図ることができる。

6 所属校での実践から

専門研究員の所属校である名取市立ゆりが丘小学校(10/17, 10/19, 11/8)、石巻市立蛇田中学校(10/2)、登米市立東郷小学校(11/14)にて、実践を行った。その結果と考察及び研究への活かし方

を下記のようにまとめた。

6. 1 授業力セルフチェックシートについて

『授業力セルフチェックシート』を使って、自分の授業力についての長所や課題が見付かりましたか」との質問項目については、3校で38名の教員から回答を得て、表9のような結果となった。

表9 所属校での質問紙調査より

回答	はい	いいえ	未記入
人数(人)	31	5	2
割合(%)	82	13	5

「はい」と答えた割合は、80%を超え、授業力セルフチェックシートが自分の授業力を振り返る手段として、実践校においては有効だったことがうかがえる。このことは、記述からも捉えることができた。主な記述は次の通りである。「自分の授業力をデータに出すことで、目に見える形で客観的に見ることができる」「自分に課題が多いことは自覚していたが、具体的に振り返ることがなかなかないので客観的に見ることができた」「大変すばらしいセルフチェックシートでした。自分自身を振り返る機会になりました」等の肯定的な意見が多かった。

しかし、「診断項目数が多い」「もっと見やすく」等の意見もあり、診断項目やシート画面の色づかいや構成等の見直しを進め、より使いやすいシートにするために改善を加えた。

6. 2 研究授業について

研究授業においては、授業力向上の観点から自己目標に基づく「私の提案」を取り入れた授業を行い、参観シートで手だてが有効かどうかを見取った。実際に研究授業を参観する際に記入してもらい、使い勝手に対して意見をいただいた。主な意見は次のようなものである。「視点に対する手だてがしっかり載っていて見取りやすく、後からも見やすいものになっていた」「授業者が何を大切にしているのが明確に分かり、工夫点に注目できた」等である。指導案だけでなく、参観シートを工夫することでよりよい見取りを行うことにつながるようになった。なお、改善点についても多くの意見をいただき、その後、参観シートから見合いシート、指導案シートへとよりよく見取るためのシートの作成へとつながった。

6. 3 事後検討会について

事後検討会については、これまで行われてきた「研究の視点に関する」ワークショップに「それぞれの課題に関する」ワークショップを加え、2部構成を試みた。ワークショップ自体については、概ねスムーズに進行されたと考える。しかし、「1回目と2回目で明確な差が分からない」「2部構成は話しにくかった」等の意見もあり、ワークショップを行う際の話合いの観点を明確にすることやグループ分けを工夫することが必要であった。これは、限られた時間を有効に使うためにも考えなければならない。個々の教員による授業力向上のためのワークショップのもち方や内容の検討、支援するためのシートの作成につながった。

6. 4 授業を見合うことについて

個々の教員による授業力向上の取組の中心は、授業である。研究授業だけではなく、授業を見合うことができれば教員同士の気付きや学びの交流が増え、授業力向上に大きく影響を与えると考える。授業を見合う実践を多く試みたかったが、ゆりが丘小学校での1クラス1回の実践となった。

見合いシートの大まかな書式や構成はよかったが、細かな文言や書き込む部分の設定については、分かりやすさや書き込みやすさをさらに検討しなければならない。短時間で見合うことに関しては可能だと考えるが、授業者からは、時間設定が難しいと指摘を受けた。「私の提案」が学習過程の後半にあるほど、予定時刻と授業の進み具合にずれが生じて、参観者に設定時間通りに見てもらえない可能性があるとの内容だった。また、提案についてのアドバイスや授業者のよさ等の気付いたことに関しては、授業者の励みになる内容や書き方としたことで、読んだ授業者から励みとなったとの感想をいただいた。

この実践では、見合いシートの書式や内容の見直し、授業を見合う取組の必要性を確認することにつながった。

7 研究の成果と課題

7. 1 研究の成果

児童生徒の学力向上を目指し、授業力向上の取組を校内研究と関連付けて進めるために「授業力向上支援シート」を作成し、個々の教員の授業力向上を通しての授業改善の在り方を追究してきた。その成果は、

- ・「授業力向上支援シート」を作成し、示したこと
- ・個々の教員の抱える授業力の課題に注目し、課題の軽減・解決の手だてと校内研究の視点（仮説）とを関連付けることで、個々の教員の課題意識に沿った授業力向上が、校内研究に取り組むことで図られるようにしたこと

の2つである。

(1) 「授業力向上支援シート」を作成し、示したこと

個々の教員が抱える課題意識を大切に、課題の軽減・解決のための見通しをもてるような場を設定し、協働の要素を加えながら取り組むように促せば、意欲の向上や取組の継続が図られ、取組に応じた成果が得られると考えた。

そこで、個々の教員が抱える授業力の課題を明らかにして、その解決のための手だてと校内研究の視点（仮説）と関連付け、取り組む際の自己目標を設定する。そして、個々の教員が見通しをもって自己目標に迫り、意欲的かつ継続的に授業力向上を図ることができる取組とした。

しかし、個々の教員が抱える授業力の課題を明らかにしたり、課題と校内研究を関連付けたりする等、各取組を支援する具体的な手だてが必要である。そこで、

- ・自分の授業力の現状を数値で把握し、自己目標と目標達成までのスモールステップを設定できる
- ・高めたい授業力を向上させる手だてと校内研究の視点（仮説）とを関連付けて校内研究に取り組むことで、自分の課題に沿った授業力向上を図ることができる
- ・授業力向上の取組に応じた振り返りができる
- ・授業力向上の取組で気付いたことや学んだことを記録・蓄積でき、さらに「段階」「学習の場面と手だて」「手だての内容」「指導上の留意点」という4つの項目でまとめ、授業で活用できる
- ・学習指導案上の授業者の提案部分に、気付きや学んだことを書き込むことができ、そのシートを授業者に渡すことで参観者の学びを授業者に還元できる
- ・個々の教員の取組の成果を、全教員で共有できる
- ・1年間の取組を振り返り、授業力向上を数値の変化で実感するとともに、次年度の取組の方向付けができる

という点に留意して「授業力向上支援シート」を作成し、具体的な手だてを示した。「授業力向上支援シート」を活用することで、個々の教員の授業力向上の取組が進み、授業改善が図られると考える。

さらに、「授業力向上支援シート」を表計算ソフトにまとめ、ボタン操作でシートを切り替え可能にしたことで扱いやすさに配慮した。

(2) 授業力向上のための取組を校内研究と関連付けて、一連の取組としたことについて

本研究では、個々の教員の意欲の向上や取組の継続を支援の中心を置いた。そのため、個々の教員が抱える授業力に関する課題を明確にすることと、課題と校内研究とを関連付けることに留意して研究を進めた。その結果、校内研究に取り組むことで個々の教員の課題に沿った授業力向上を図ることができるように一連の取組として示すことができた。

また、校内研究の協働のよさを活かし、授業力向上の取組に「授業の見合い」をはじめ、学年・

教科等による話し合い、他の教員の成果から学ぶ場面の設定等の場面、シートを通して互いに認め合い、助言し合う場面を取り入れた。そのようにすることで授業力向上の取組の効果を高めるとともに、一体感をもって取り組む雰囲気をつくり、日常的に教員間で授業が話題となることも期待できるようにした。

7. 2 今後の課題

今後、この取組を進めるに当たっては、以下の2つの課題がある。

- ① 「授業力向上支援シート」の効果と、授業力向上の取組を進める際の留意点を明らかにすること
- ② 個々の教員の課題と校内研究との関連付けの図り方

課題に対する改善策を手だてや留意点とともに1つでも多く明らかにすることが、個々の教員の授業力向上の取組をより効果的なものにし、授業改善を進めることにつながると考える。

- (1) 「授業力向上支援シート」の効果と、授業力向上の取組を進める際の留意点を明らかにすること

今後、授業力向上の取組を所属校の校内研究と関連付けて実践し、「授業力向上支援シート」を活用した取組の効果を検証したり、取組を進める際の留意点を明らかにしたりして、個々の教員の授業力向上に役立てることが必要である。「授業力向上支援シート」を活用した、より効果的な支援の仕方を探りたい。

- (2) 個々の教員の課題と校内研究との関連付けの図り方

課題である高めたい授業力と校内研究の視点（仮説）とが関連付かず、授業力向上の取組の方向性を「個人で取り組む」とした際は、その後の取組の中で研究主任が働き掛けたり、学年・教科等での話し合い等の支援を行ったりして関連付けを図る。そして、校内研究のよさを活かしながら取り組むことで課題となる授業力が高められるようにする。しかし、関連付けを明確にすることはなかなか難しく、設定には個人差があることが所属校での実践で明らかになった。そこで、関連付けを無理なくできるように手だてを工夫すれば、早い段階で目標を明確にもって校内研究に参加することができ、授業力向上を図ることができると考えるので、関連付けのよりよい方法を探りたい。

主な参考文献

- | | | |
|------|--|------|
| [1] | 宮城県教育研修センター：「平成15年度 学力向上研究グループ研究報告書」 | 2004 |
| [2] | 堀公俊：「ファシリテーション」（日経文庫） | 2004 |
| [3] | 東京都教職員研修センター：「学力向上を図るための指導に関する研究」～授業力向上のためのOJTシステムの開発～ | 2006 |
| [4] | 木原俊行：「教師が磨き合う『学校研究』授業力量の向上を目指して」（ぎょうせい） | 2006 |
| [5] | 愛媛県教育委員会：「小学校・中学校 授業評価システムガイドライン」 | 2007 |
| [6] | 横浜市教育センター：「授業力向上の鍵3」～校内授業研究の活性化に向けて～ | 2007 |
| [7] | 原田隆史：「夢を実現させる60日間のワークブック」（日経BP社） | 2007 |
| [8] | 吉田新一郎・岩瀬直樹：「効果10倍の〈学び〉の技法 シンプルな方法で学校が変わる！」 | 2007 |
| [9] | 宮城県教育委員会：「宮城県教員研修マスタープラン～学び続ける教員のために～」 | 2008 |
| [10] | 宮城県教育研修センター：「平成19年度 学校改善研究グループ研究報告書」 | 2008 |
| [11] | 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 総則編」 | 2008 |
| [12] | 文部科学省：「中学校学習指導要領解説 総則編」 | 2008 |
| [13] | 広島県立教育センター：「平成21年度 共同研究『校内研究の活性化を支援する評価システムに関する研究』」 | 2009 |
| [14] | 宮城県教育委員会：「平成22年度全国学力・学習状況調査 宮城県の調査結果報告」 | 2010 |
| [15] | 国立教育政策研究所：「校内研究等の実施状況に関する調査」 | 2010 |
| [16] | 宮城県教育委員会：「宮城県学校改善支援プラン」 | 2010 |
| [17] | 宮城県教育委員会：「宮城県教育振興基本計画」 | 2010 |
| [18] | 宮城県教育委員会：「平成22年度全国学力・学習状況調査 宮城県検証改善委員会報告書『伸びる子ども かわる学校 学ぶ教師』～今日から活用できる授業改善のポイント」 | 2011 |
| [19] | 埼玉県立総合教育センター：「『授業力』自己診断シート」 | 2011 |
| [20] | 宮城県教育委員会：「宮城県学力推進プログラム（改訂版）～学ぶ喜びを子どもたちに～」 | 2012 |
| [21] | 鹿児島県総合教育センター：「平成22・23年度 調査研究 『授業力を高める校内研修の進め』～みんなで取り組み、学び合う授業研究を通して～」 | 2012 |
| [22] | 中央教育審議会：「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（答申） | 2012 |